Z32-B88
国立国会図書館
8. 3. 26

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

純情無垢な少年少女のために責任を以て本書の愛誦されむことを推賞す
（本書中既に都市小學校にて、又、各家庭にて愛誦されつゝ有るもの少なからざるなり）

（新版）

童謡集 十五夜お月さん

野口雨情先生著
本居長世先生
岡本一歸先生
曲畫

皆様がお待ち兼ねの野口雨情先生の童謡集『十五夜お月さん』が愈〻出來ました。本書は最初二三圓の高價な本として賣出すつもりで居りました處。先生が『それでは私の素志に悖るから是非とも大勢の子供さん達に容易く買はれるように價格を安くして、出來るだけ内容を豐富にし猶體裁も出來るだけ立派に、御兩親方も兄さん姉さん達も喜んで本書を愛子なり弟妹なりへお與へになられるように』とのお言葉に、弊堂に於ても先生の意に隨ひ、殆ど實費と同一價を以て全國の子供さん達に頒ち、純日本童謡の傑作集として皆様へ御愛讀をお薦めいたします。

四六版全一冊 送料壹錢
箱入最上製美本 實價金壹圓八十錢
頗美本 井錢

一編 西條八十先生著 抒情小曲 靜かなる眉 第十二版 袖珍箱入天金頗美本全一冊 實價金九十錢 送料五錢
二編 水谷勝先生著 抒情小詩 寶石の夢 忽ち四版 袖珍箱入大金頗美本全一冊 實價金九十錢 送料五錢
三編 野口雨情先生著 民謡集 別後 忽ち四版 袖珍箱入金線頗美本全一冊 實價金九十錢 送料五錢

東京市神田區南神保町十六
振替口座東京一九三四四
尚文堂發行

廿三版 林檎の落つる音

文部省認定

一戸理學博士序　農學士　渡邊白鷹著

■四六版三百頁　最上製美本■　定價壹圓參拾錢　送料八錢

科學思想に乏しいのは日本人の大缺點であります。この缺點のために日本の進歩が如何に妨げられて居るかは想像に難くないのであります。歐洲戰後に於て特にこの問題が矢釜しく論議されるやうになつたのは偶然でないと思ひます。本書はむづかしい科學の知識を面白、可笑しく少年少女の頭腦へつぎ込むことに付て餘程苦心をして書かれたものでありまして、日常に於て少年少女が自然に疑を起す數十の實例について、極めて分り易く、而も一種の興味を以て引き込まれながら、讀んで行くやうに書かれてあるのであります。曩に文部省よりは家庭の讀物として認定されて居ります。今回新に二十三版が出來ましたから、どうか御愛讀を願ひます。

一戸理學博士序　科學思想が國民に普及すると否とは我國家の進歩に大關係あることは勿論である。本書は科學を一般の人々に厭ふ氣を起させずに讀ませる點に於て大に成功したものと思うて感心してゐる。著者が六かしい近世の學問を此樣にくだけて書くまでにはさぞ苦心したことだらう。此點に於て同學士に敬意を表する云々。

面白い科學の話

圖書目錄往復端書に御申込あれば■

東京神田中猿樂町　越山堂　振替東京一二九五四　電話九段一三一二九

ニッポノホン

爽やかに聽く

鷲印レコード

風薫る朝

目錄月報無代進呈

面白い五月賣出し新譜		
曲種	曲目	演奏者
浪花節	五郎正宗（貳枚ツヅキ）	天中軒雲月
浪花節	勝田新左衛門	天中軒雲月
俚謠	大漁網おこしの賑ひ（鰹の沖揚げ）	西崎外鶴　速中鶴
合奏	君代數へ唄、十日戎	如月社邦樂部員
長唄	鷲娘（羽ばたき）	松島庄十郎　三味線杵屋彦之助
帝國派琵琶	乃木將軍永遠の別れ（二枚ツヅキ）	松田翠濤
義太夫	沼津（兩面二枚）	豐竹古靚太夫　三味線鶴澤清六
俚謠	追分（尺八伴奏）	越中谷四三郎　尺八後藤桃水
唱歌（女學三部）	高嶺の兒の唄	日蓄音樂部員
八木節	彌次郎兵衛喜多八（尺八伴奏二枚ツヅキ）	大正坊主
浪花節	夕立勘五郎	玉川太郎
書生節	きつた且那節　めさん節	市川皖保　秋山掃代
常盤津	將門（兩面二枚）	常盤津松尾太夫

樂しからずや

株式會社日本蓄音器商會
販賣部　東京京橋銀座一丁目　大阪東區南久寶寺町四丁目

信用ある蓄音器店は何れも當社の特約店なり

NIPPONOPHONE

鈴木善太郎先生著（母と子文庫第一篇）いよ〳〵出來！

たんぽぽの家

自第一篇 至十二篇 全十二卷

各冊 四六版 二百二十頁以上 口繪三色版表紙石版刷四度刷 裝幀並に口繪川上四郎先生

定價 各冊 壹圓三十錢

送料（市内六錢 外十二錢）

特價

全十二卷購讀契約者には別に特價を提供す希望者はお申込あれ、見本並に規定書を呈す。

人間の生れながら持つた清い魂を、ます〳〵美しくするために、新らしい時代の要求に應じて現れた讀物は『母と子文庫』であります。どんなにいい本であるか、どんなに勝れた特色があるか、どうぞ出來て行く本を次々に御覽下さい。第三篇『日の出づるまで』茅野雅子先生著、毎月一冊づつを刊行いたします。

第二篇 森の祈り 沖野岩三郎先生著

本月出來

東京市小石川區 戸崎町十九番地 創文社 電話 小石川四八八七 振替 東京三五二四番

一新境を開拓したる
豐調情なる童話集

童話 蟻のお國

長田秀雄先生著

□最新刊

定價壹圓七拾錢郵稅六錢
四六判頒美本美麗口繪附

新緑を吹く微風のやうに、讀者をして常に清新の氣に觸れしめ、少年少女諸君を魅してその心をしつかり捉へずには置かないのは著者長田先生特獨の筆致であります。本書は先生最近の傑作童話八篇と童話劇二篇を收めたもの。趣味津々、一讀恍惚として卷を措くを忘れしめます。裝釘又頗る優美で、見るからにしみじみと懷しくしつかりと胸に抱きしめたいやうな書物であります。それにこの童話劇は家庭ででも學校ででも實演が出來ますから、どうぞ早くお求め下さい。

□この書物は諸學校の選□
□外讀本となつてをります□

實業之日本社
東京市京橋區南紺屋町
振替口座東京三二六番

島崎藤村先生二大童話集

幼きものに

十七版 定價八十錢 郵稅六錢

母なき四人の幼き子達のために、著者の佛蘭西土產として西洋の珍らしい物語を述べられたもので、興味の深い七十七項の小話が收められてあります。

ふるさと

十版 定價壹圓 郵稅四錢

「雀のおやど」以下七十篇、何れも木曾山中に行はれた昔噺が、著者の獨創的な靈筆で再現されたもので、山中の風物人情が鮮かに描かれてをります。

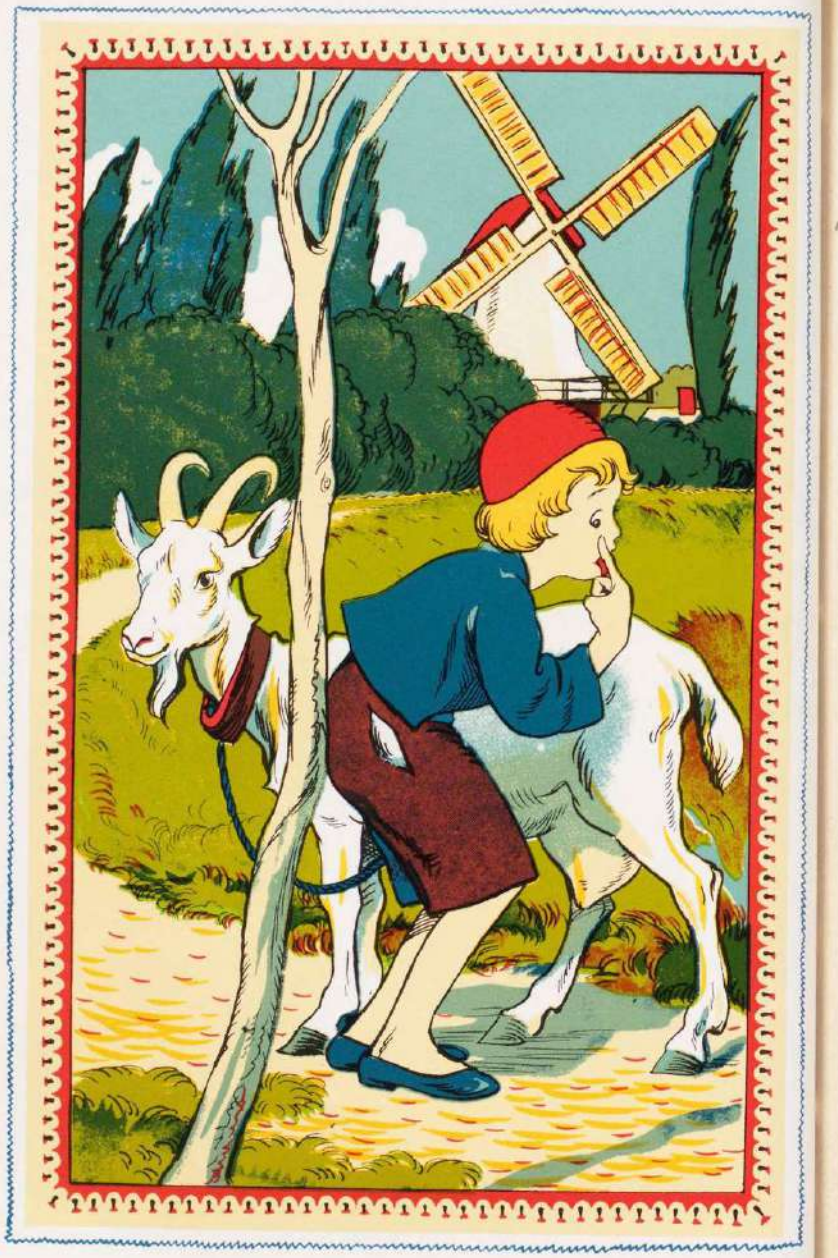
目次

はたる（表紙、石版刷）……岡本歸一
羊を探しに（口繪、原色版）
日傘（童謡、曲譜）……一……本居長世　野口雨情
素盞雄命（日本神話）……四……楠山正雄
兎と龜後日物語（童話）……一六……有島生馬
なゝちやん（繪ばなし）……三……岡本歸一
石塊島の話（諸國傳說）……二六……藤澤衛彦
試驗問題（童話）……二八……沖野岩三郎
庄屋と鹿（童話）
畫家と音樂師（ポンチ畫）……三六……船橋重一
二人の泥棒（童話）……三八……齋藤佐次郎

坊やが大きくなつたら（童謡）……四九……內藤豐雄
雨がふる（童謡）
印度イソップ物語（寓話）……五〇……楠山正雄
鏡國めぐり（長編童話）……五二……西條八十
ラムシニトス王の寶の話（童話）……六一……長尾豐
豐作唄（童謡）……六八……野口雨情
テニス（自由畫）……七〇……山本鼎選
蛙（童謡）……七一……野口雨情選
ひばり（幼年詩）……七四……若山牧水選
ネズミ（繪方）……七四……編輯部選
通信……八〇
挿繪……岡本歸一

附錄

後の山六爺さん……沖野岩三郎



羊を探しに

岡本歸一 畫

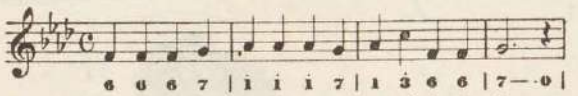
チユエノは森にかくれて、めい〳〵〳〵と親羊のやうな啼聲を立てました。下男は立止つて、『おや〳〵昨日見えなくした羊が道に迷つて啼いてゐるのだな』と考へました。

下男はかついでゐた小羊を草の上に下して、啼聲のした方へ急いで行きました。そこで、チユエノはまんまと小羊を盗みました。

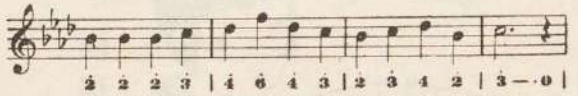
（二人の泥棒の四十八頁を御覧なさい）

日傘

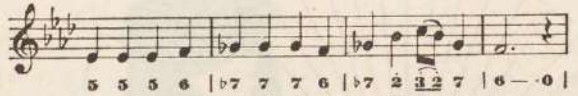
本居長世作曲



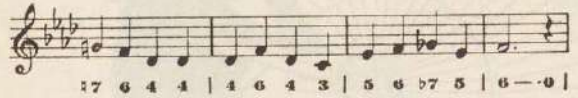
6 6 6 7 | i i i 7 | 1 3 6 6 | 7 — · 0 |
わかれた かかさん ひがらかさ



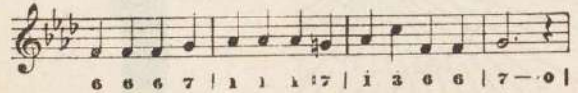
2 2 2 3 | 4 6 4 3 | 2 3 4 2 | 3 — · 0 |
ものゆうて くだされ ひがらかさ



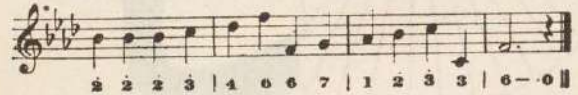
5 5 5 6 | ♭7 7 7 6 | ♭7 2 3 2 7 | 6 — · 0 |
おせごに かぜふく しのやーぶは



:7 6 4 4 | 4 6 4 3 | 5 6 ♭7 5 | 6 — · 0 |
からすに くはれた すひかづら



6 6 6 7 | 1 1 1 :7 | i 3 6 6 | 7 — · 0 |
かかさん わたしも ひからかさ



2 2 2 3 | 4 6 6 7 | 1 2 3 3 | 6 — · 0 ‖
ものゆうて くだされ ひがらかさ

野口雨情

わかれた　母さん
日傘
もの言うて下され
日傘

お背戸に　風吹く
篠藪は
鳥に喰はれた
鳥瓜

母さん　わたしも
日傘
もの言うて下され
日傘

素盞雄命（日本神話その四）

楠山正雄

一、八岐の大蛇

いたづらを爲て高天原から追出された素盞雄命は、それからどうなすつたでせう。

さて命は下界へお下りになつたものの、どこへ行くといふあてもありませんから、足にまかせてぼんやり歩いておいでになるうちに、出雲の國の簸の川の川上に當る鳥髪といふ所へお出になりました。

そこは人里をとほく離れた谷の中で、空には鳥のとぶ影さへ見えません。命はぼんやり川べりに立つて、水の流れを見ていらつしやいますと、川上からお箸が二本流れて來ました。

『おや、飯を食ふ箸が流れて來た。それでは此の邊にも人が住んでゐるにちがひない。』と命はお思ひになつて、お箸の流れて來た方に向つて、また

ずん〳〵川を傳はつてお出でになりますと、どこかで人の泣く聲がします。

不思議に思つて、泣聲を目あてに近づいてごらんになりますと、川の傍に小さな家があつて、中で人の好ささうなおぢいさんとおばあさんとが、十六七の可哀らしい娘を中に据ゑて、おいおい泣いて居るのでした。

命はこの容子を御覽になると、

『これ〳〵お前たちは、何をそんなに泣いて居るのだ。』

とお聞きになりました。

するとおぢいさんは、命の氣高いお姿を見て、これはたゞの人ではないと思つたものですから、てにねいにおじきをして、

『どなたさまかは存じませんが、御親切によくおたづね下さいました。わたくし共は此の山の神で、わたくしの名は足摩乳、このばゞの名は手摩乳と申します。これはわたくし共の娘で、奇稲田姫と申します。もとは八人も娘がございましたが、毎年々々越の國から八岐の大蛇といふ恐ろしい怪物がやつて參りまして、一人づゝ娘を取つて行きましたので、只今ではこの子たつた一人になつてしまひました。それさへ今夜はもう大蛇の贄に出さなければならないので、この通り親子三人が別れを惜しんで泣いて居るのでございます。』

と申しました。

命はお聞きになつて、

『それはどうも氣の毒なことだ。だが心配することは無い。大蛇はわたしが退治てやらう。その代りお前の娘をわたしにくれないか。』

と仰しやいました。

命のさう仰しやる容子がいかにも男らしくきびき

びと、わだかまりがないので、年寄夫婦も何となく頼もしく思ひました。それでもまだ命がどんな方だか知らないものですから、

『それはもう大蛇さへ退治て下さいましたら、娘をお上げしてもよろしうございますが、失禮ながらどなたさまでせうか。お名前をうかゞひたいものでございます。』

と申しました。

命は笑ひながら、

『はッはッは、これはわたしが惡かつた。大空から降つたわたしは神の子だ。天照大神の弟だ。』と仰しやいました。

年寄夫婦はびつくりして、

『まあさやうでございますか。存じませんものですから、とんだ粗相を申上げさしました。どうぞおゆるし下さいまし。』

お傍へ差上げたうございます。』と申しました。

そこで命は、奇稲田姫を、大蛇の目にかゝらないやうに、すぐと可哀らしい櫛に化けさせておしまひになりました。そしてその櫛を頭にお挿しになつたので、おぢいさんとおばあさんはまたびつくりしてしまひました。

命はそれには構はず、呆れた顔をしてゐる二人をせき立てて、まづ八醞の酒といつて、强い酒を釀させました。それから家のまはりに垣根を結はせ、その垣根に八つ門を作つて、その門に一つ〳〵、都合八つの棧敷をしかけ、その棧敷の上に一つ一つ八醞の酒をなみなみと盛つた酒槽をのせさせて、すつかりしたくができ上がると、大蛇の來るのをいまか〳〵と、待ちかまへておいでになりました。

その中に日が暮れてそこらが闇くなつて來ました何となく草木がざわ〳〵しはじめると思ふと、血腥

い風が向ふの山からどつと吹き下して來て、物すごい景色になりました。

ふと見ると闇の中からぴかり〳〵、赤い酸漿か火の玉を十六並べたやうな長い行列がずん〳〵山を下りてこちらへやつて來ました。

しかしそれは赤酸漿でも、火の玉でもなく、八岐の大蛇の目玉でした。

やがて傍へ近く來たのを見ると、なるほど八岐の大蛇といふやうに、頭も八つ、尾も八つ、八方にわかれてゐました。

その胴の長さといつたら、八つの峯と、八つの谿を長々と取りまくほどで、脊中には一杯巖のやうに苔が生えて、その間から檜の木や杉の木がによきに〳〵突き出してゐました。そしてその腹はいつも人間や獸の生血にひたつてゐるため、眞赤にうぢやぢやけてゐました。

大蛇は十六の赤い目を燃えるやうに光らせながら鼻に上がつたむすめをたゞ一呑みにしようと思つて來ると、鼻先にふと芳ばしいお酒の匂ひがぷんと立ちました。するとむすめのことなぞはつい忘れてしまつて、長い氣味のわるい舌をべろ〳〵出しながら、八つの酒槽に、八つの首を突込んで、さも甘さうにがぶ〳〵、がぶ〳〵お酒を飲みはじめました。

素より強いお酒のことですから、八つの酒槽が空になる頃には、大蛇ももうべろ〳〵に醉ひつぶれてぐう〳〵嵐のやうな高いびきを立てて、八つの首は正體もなくそこに寢込んでしまひました。この時まで小蔭からじつと容子をうかゞつていらしつた素盞雄命は、

『もういい時分だ。』とお思ひになつて、腰に下た十握の劍を拔いて長々と寢た大蛇の首といはず、胴といはず、ずた〳〵に切りこまざいておしまひになりました。切れば切る程その體からはどく〳〵血が流れ出して、簸の川は忽ち眞赤に溢れてしまひました。

さて一ばんおしまひに八つの尾を一つ一つ切つてゆく中に、五本めの尾へ來ると、かちんといふ音がして劍の刃がぽろりと少し缺けました。今になつて切味の鈍るはずはないがと、命は不思議に思召して、こんどは劍の刃尖で大蛇の尾を縱に切り割いて御覽になりますと、不思議なことに、そこから雲のやうなものがすうと立上つて、中から一口の劍が出て來ました。よく見ると、中身といひ、

飾といひ、類のない立派な劍でしたから、命は、『これは神の劍だ。』と仰つて後に天照大神の所へお送りになりました。これが天の叢雲劍、後に草薙の劍といつて三種の神器の一つとなつた寶劍です。

さて首尾よく八岐の大蛇を退治してしまつたので素盞雄の命は約束の通り、奇稻田姫をお嫁になさいました。

その時分はお嫁さんができると、新らしく御殿を作つて住まふことになつてゐましたから、命もどこかいい所を探して奇稻田姫と一しよに住まはうとお思ひになつて、出雲の國中を方々お歩きになりました。とう〳〵おしまひに、ひろ〳〵とうち開いたいい景色の土地に出ました。涼しい風がどこからかそよそよ吹いて、日がうら〻かに照つてゐました。

『あゝ、ここへ來たら急に清々しい氣がする。』

かう命は仰しやつて、そこへ御殿をお建てになりました。それでその土地を今でも清と呼んでゐるさうです。

御殿がやがてでき上がつて、奇稻田姫をお迎へとりになりますと、美し

い雲が山の下からむく〳〵湧き出して來て、御殿を神々しくとりまきました。命はお喜びになつて、

『八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣作るその八重垣を。』といふ歌をお詠みになりました。そしてお嫁さまを迎へて住まはうとする御殿に、雲が來て垣根を作つてくれたことをおほめになりました。このお歌が日本の三十一字の歌の始めだといふことです。

二、國　引　き

素盞雄命が、お住ひを探しに出雲の國中をめぐり歩いてお出でになる間のことでした。或日命は高い山の上から出雲の國の容子を御覽になつて、

『出雲といふ國はまるで帶をひろげたやうな狹くるしい國だ。これからわたしの住まうといふ國が、これでは小さすぎてしかたが無い。もつと土地を繼ぎ足す工夫は無いかしらん。』と獨言を仰しやつて、海の方をはるかに御覽になると、朝鮮の南に當る新羅の國の鼻に邪魔らしく出つぱつた所のあるのがお目に入りました。命は、

『あるぞ、あるぞ、あすこに餘つた國があるぞ。』と仰しやつてその新羅國の鼻にいきなり大きな鋤をずぶりと入れて、その鼻を切りはなしておしま

ひになりました。そしてそれに三本の太い綱をくる〳〵と引つかけて、

『ほう、國來い、ほう、國來い。』と掛聲をかけながら、川舟を曳くやうにそろり〳〵と海の上を引いて來て繼ぎ合せたのが今出雲の國の小津の浦から、杵築の岬までの海岸だといふ事です。

その時命は、せつかく引いて來た國がまた流れて行くといけないと思召して、舟を岸に、もやふやうに、海の中に太い杭を立てて、これに綱を引つかけて國を繫いでお置きになりました。その杭が後に化けて山になつたのが、今出雲の國と石見の國との間に聳えてゐる三瓶山で、曳き綱がそのまゝ長い砂濱になつたのが、今の杵築の岬の南にある薗の長濱だといふことです。

けれどもまだなか〳〵この位のことでは足りませんから、

『まだどこかに餘つた國はないか。』と命が御覽になると、出雲の國の北の方に隱岐のはなれ島がぽつり海の上に浮かんでゐました。その南の鼻にちよいと出つぱつた所があつたので、

『あるぞ、あるぞ、あすこにも餘つた國があるぞ。』と仰しやつ

て、また同じやうに大きな鋤をずぶりと入れて、その鼻を切りはなしておしまひになりました。そして三本の綱をくる〳〵と引つかけて、

『ほう國來い、ほう國來い。』と掛聲をかけながら、川舟を曳くやうに海の上を曳いて來て繼ぎ合せたのが、今の多久村から狹田村の間の濱だといふことです。けれどもまだ〳〵これでは足りませんから、

『まだどこかに餘つた國は無いか。』と命が御覽になると、こんどはもつとはるかな北のはづれの海に浮かんでゐる能登の國の珠洲の鼻にもちよいと出つぱつた所がありました。命は、

『あるぞ、あるぞ、あすこにも餘つた國があるぞ。』と仰しやつて、また同じやうに、大きな鋤をずぶりと入れて、その鼻を切りはなしておしまひになりました。そして三本の綱をくる〳〵と引つかけて、

『ほう、國來い、ほう、國來い。』と掛聲をかけながら川舟を曳くやうにそろりそろりと海の上を曳いて來て繼ぎ合せたのが、今の美保の崎だといふことです。

この時曳いて來た綱がそのまゝ長い砂濱になつたのが今の伯耆の國の夜見が濱で、綱をつないだ杭が山に化けたのが、今の伯耆の國の大山だといふことです。

これでやつと出雲の國が廣くなつたので、素盞雄命も、『まづこれでよし。』とお思ひになりました。そして何しろ三つも國を引いて來て、大分おくたびれになつたので、森の中の樹蔭に杖をついてほつと一息おつきになると、

『おう、おう、がつかりした。』と仰つしやいました。

そこでこの森を今でも意宇の森といふのです。

三、富士の神と筑波の神

その時分、日本の國は、まだ草も木も少くなつてどこへ行つても禿山と荒野ばかりでした。

素盞雄命は或時、朝鮮の國にお渡りになつて、金や銀の山がたくさんあることを見ておいでになりました。けれども船がなくつては、日本の民がずんずん海を越えて外國へ渡ることができません。それには何よりも船にする木から植ゑてかゝらなければならないと命はお思ひになつて、まづ長い鬚をぬいて、一本々々お吹き散らしになりますと、杉の木になりました。また胸毛をぬいて、一本々々お吹き散らしになると、檜の木になりました。それからお腰の毛は槇の木になり、眉毛は楠の木になりました。その時命は、人民に、

『杉と楠の木で船を作れ。檜で家を建てよ。槇は死

人の棺にせよ。』とお申渡しになりました。

かうして杉や檜が日本の國にすん〳〵ふえて國中どこにもこゝにも美しい森が育つやうになりました。

そこで素盞雄命は或時、日本の國がどんな風に育つたか人民がどんな風に暮らしてゐるか見て來ようとお思ひになつて方々旅をしてお歩きになりました。それもなるべく目に立たないやうに、わざとぼろ〳〵な貧乏人の着物を着ておでかけになりました。

或日ちやうど駿河の國の富士の山までおいでになりますと、とつぷり日が暮れてしまひました。命は富士の神樣の所へ今夜は、賴んでとめてもらはうとお思ひになつて、とん〳〵と戸をお叩きになりました。すると富士の神が中から出て

來て、命の仰しやることを聞きながら、しばらく樣子をじろ〳〵ながめてゐましたが、不機嫌らしい聲で、

『今夜は早稻の新嘗まつりで、家の中をすつかり清めて、穢れを愼んでゐるところだから、お前さんのやうなきたならしい人をとめることはできない。』

といつたなり、ぴしやんと戸をしめてしまひました。

命は大そうおこりになつて、

『よし〳〵、そんな人情のないことを爲るなら、これから後、富士の山は年中冬も夏も雪が積つて、寒さがひど〳〵つて、誰も上るものもないし、お供物を上げるものもないやうにしてやるから。』と、呪ひの言葉をのこして、こんどは常陸の國の筑波山にお上りになりました。

命が筑波の神樣の家へ行つて、宿をお賴みになりますと、筑波の神は大そう氣の毒に思つて、

『ごらんの通り狹くるしい住ひですが、ちやうど今夜は新嘗まつりで、汚れのないやうに家の中をすつかり清めてありますから、心持よくお休みになることができませう。』かういつて、命を中へ入れて、しんせつにお世話をいたしました。命は大そうお喜びになつて、筑波の山の上に、いつも青々と木を茂らせ、美しい花を咲かせて、一年中人の上れるやうに溫かな、いい山にしておやりになりました。

かういふわけで、富士の山は今でも始終雪が積つてゐて、人のあまり上らない寂しい山ですが、筑波の山は春は春、秋は秋で、大勢遊びに人が上つて、いつも賑かな笑ひごゑが絶えないのです。

素盞雄命は、その後永らく出雲の國に住んでおいでになりましたが、何十年か立つてから、かねてのお望みどほり、母神の伊奘冉命のいらつしやる夜見の國にお出ましになつて、それなり歸つておいでになりませんでした。（つゞく）

兎と龜後日物語

有島生馬

『桃子さんおかしいお話を一つして上げませうか。それはたつた昨日あつた話よ　兎と龜のるでせう。あれみたいな話よ。あれみたいな話つて云ふより、あれの「後日物語」みたいな話よ。本統にあつた話よ。さうして兎も龜もみんなあなたが知つてゐるんだから、面白いのよ。

海原さんの小父さんを知つてゐらつしやるでせうあの小父様はね肥つて丈が低くつて、お腹の大い割に手と足が短いでせう。いつもゆつくりお歩きになるでせう。海岸の岩の上にのそ〳〵出ていらしつて腰をかけて休んでいらつしやるのを、窓から私が見付けると、そら又龜さんが甲羅を干しに來たつて云

ふのよ。』

『あらお惡い方ね。』

桃子さんは味噌歯を見せて笑ひ出しました。考へると海原の小父さんが、今にもそこに出て來さうなので、折角笑がとまりかゝつたのに亦等ひ出しました。

『そんなにお笑ひになつてはいや、お話が出來ないぢやあありませんか。』

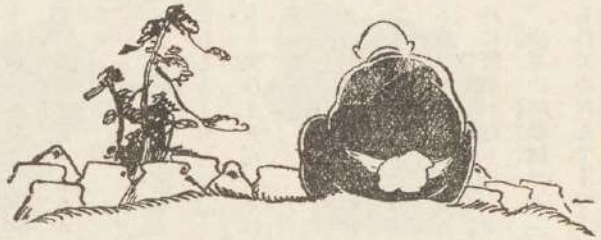
『もう笑ひません、それぢあ海原さんの小父さんが龜さんなの。』

『えゝ、さうよ。それから内のお父様が兎さんよ。小さくつて、耳が打團のやうで、少し跛でせう。だから急いで歩くとぴよん〳〵はねるやうに見へるのそれに野菜が好きで、青物をぼり〳〵喰べるから兎よ。少さい時學校でも「兎公」「兎公」つて字名をつけられてゐたんですつて。』

『あら、さう。さう云へばどつか似てゐるわね　目も少し赤いわ。あらご免遊ばせ。』

『その兎と龜さんが昨日四時頃お内の御縁側でお茶を上つていらつしやると、四五艘の船が赤い旗を押し立て、大鼓を鳴らして沖の方から海岸へ近づいて來たのよ。村の人達は男も女も口々に何か云ひながら、大急ぎでどん〳〵どん〳〵あつちに馳け出して行くの。ねえ、昨日鰤が澤山とれたでせう、何萬て一度にとれたでせう、それだつたの。

暫らくたつてから、龜さんが、どれ一つ散歩がてら鰤を見に行きませうかなと、おつしやると、兎さんも直ぐ賛成したの。行つて見ませう、××の濱なら三十分もあれば行かれるからつて。すると龜さんは三十分では行かれませんよ、四十分位はかゝりますよ、いや五十分位かな、と云つてゐらつしやるのよ。龜は龜、兎は兎だと思つたわ。



それでは君一足先に出かけてくれ給へ、僕はこれから一寸用達しをしてから行くから。

と兎さんが云ふの。

いや待つてゐる、と龜さんは云ふの。

いや君は歩くのが遲いから一足位先に行つても大丈夫だよ、と兎さんが云ふの。私はそら、そろ〳〵兎と龜の競走が初まつたと思つて一人でくす〳〵笑つてゐたの。

『それからどうなすつて。』

『それからとう〳〵龜さんの方が矢張り一足先に御門をお出になつたわ。お父樣はなんだか帽子を探したり、靴をはいたりぐづ〳〵してゐらつしやるのよ。

お父樣、そんなにぐづ〳〵してゐらつしやると、これはしまつた、しくじつた、になりますよ。龜さんに負けて終ひますよつて云つて上げたら、やつと五分許り經つてからお出かけになつたの。

それからどん〳〵急いでいらしつたんですつて、あの岩鼻を曲りさへすればきつと龜さんはそこらをのこ〳〵歩いてゐると思つていらつしやつたんですつて、所が、岩鼻を曲つても後影が見えないんですつて、おや〳〵こんなに私はおくれたかなと思ひながら、でも橋の處までにはきつと追付くだらうと思つていらしつたのに、橋まで行つてもまだ影も形も見えないんですつて、おやおかしいなと、それからは益々早足で、ぴよこん〳〵と一生懸命に電車線路に沿つて追馳けて行つたんですつて、それでも仲々追付けなかつたんですつて、息が切れる位急いだんですつて、そのうちにいつか××の濱まで行つて終つたんですつて、海原さんは大變足の早い人だな、とお父樣は感心なさつて、そこらをごらんになると、もう鰤はすつかり魚屋が引取つて終つて、漁師達は後片付をしたり、お酒を飲みに出かけたりして、淋しくなつてゐたんですつて。おや〳〵とう〳〵これはしくじつた、油斷大敵、鰤は見られず、龜さんには負けて終つたと思ふと、急にがつかりして、あんまり急いだものだから、もう歩く勇氣もないほど疲れてゐたんですつて。

それで仕方がないから電車の來るのを待つてゐて、すご〳〵それに乘つて、來た道を歸つていらしつたんですつて、電車が橋のところまで來ると、どうでせう、向ふからのそのそ歩いて來る人が一人あつて、それがどうも龜さんらしいんですつて、おかしいなと思ひながら、お父樣はもしやと、電車の窓から首を出してごらんなさると、やつぱりさうだつたんですつて。

龜さんもびつくりなさつて立停り、杖を持つたまゝ、兩手を上げて、やああ、と云つた限りだつたんです

つて。

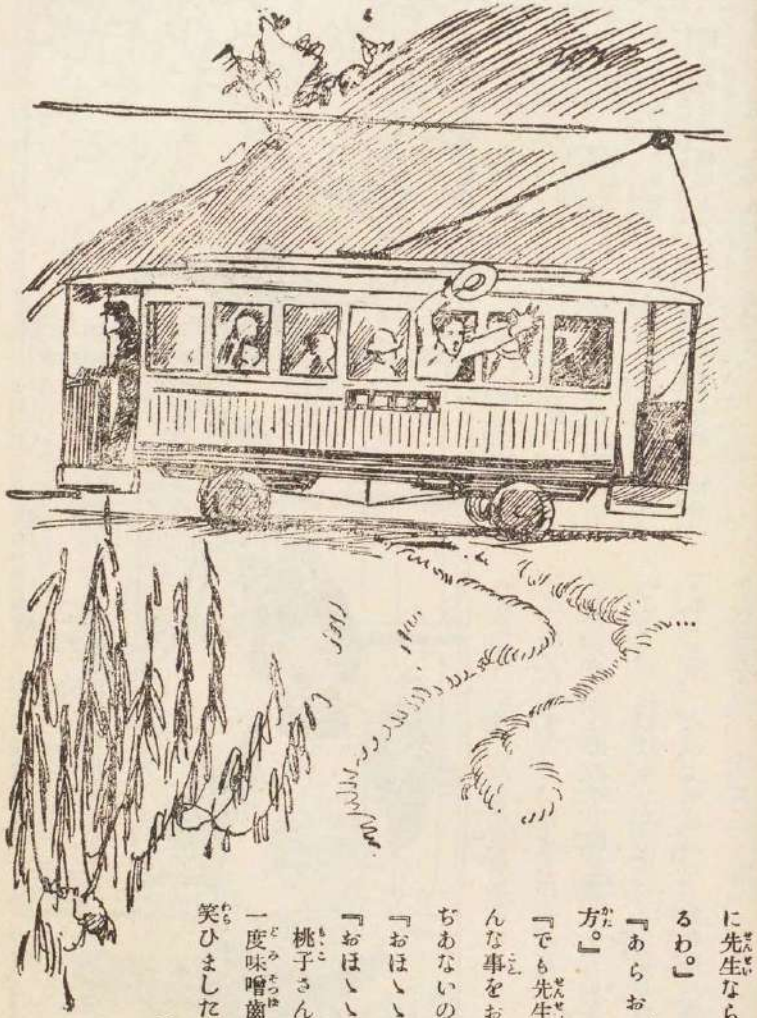
兎さんも、やあ君、と云つたと思ふ間に、電車はどんどん走りぬけて終つたんですつて、そこで初めて龜さんも兎さんも、大きな聲を出して、思はず萬歳々々つて怒鳴りながら、互に振返つて見送つたんですつて。

わきの人達もあつけにとられてゐる間に、電車はびゆ〜〜走つて、龜さんの姿は遙か向ふに行つて見えなくなつて終つたんですつて。

あとで龜さんに伺つたら、あんまり兎さんの來るのが遲いので、どらこゝらで一寸一休み……と小高い丘へ登つて散散方々を眺めてゐらしつたんですつてね龜さんは一度勝つたんで、あんまり安心し過ぎ、兎さんは一度負けたんで、あんまり狼狽し過ぎたのよ。』

『でも萬歳がをかしもね。』

『本統ね。之が兎と龜の後日物語よ。……あなた方はだから、たつた一度位勝負で勝つても安心したりさうかと云つて負けても狼狽したりしてはいけません。學校の試驗だつて同じ事です……かうお終ひ



に先生ならおつしやるわ。』

『あらお口が惡い方。』

『でも先生きつとそんな事をおつしやるぢあないの。』

『おほゝゝ。』

『おほゝゝ。』

桃子さん達はもう一度味噌歯を出して笑ひました。

（をはり）

(一)僕のお家のそばのなゝちやんは、それは可愛いい子でお庭に大ないちゞくの木がありました。毎年うまさうな實が一杯なります。なゝちやんのお家はお母さまと二人つきりで、こわいおぢさんが居ないので、僕は毎日の樣にどろぼうに行きましたが、何日でもきつとなゝちやんにめつかつて、

『あらア、お母さんまた春雄さんがア・・・』と、云ひつけられますので、仲々とれません。ある日、そつとどろぼうに出かけて塀を登らうとしますと、『このへいにのぼるべからず』と半紙に書いてはつてあります。木の上では烏が、我物顔に威ばつて食べてゐます。

(二)なゝちやんもおばさんも、女だから木へ登れやしないし、さほで落せばつぶれるし、僕がとるとおこつて、烏が食べてもだまつてゐる。僕にだけおこるいやなおばさんだと思ふと、腹立ちまぎれに

『いじ惡るばアさん、けちんぼやアい』と、どなりますと、居ないと思つたおばさん、ひよいと出て來て、

『春雄さんがけがをすると惡いからなので、登らずにとるならいくらでもおとりなさい』と云ひます。

『おばさん本當かい、僕おことれるのかと思つた』

それから今度は大びらに物干ざほを持ち出して來て、へいの外からたゝき落しましたが、合憎みんなへいの中へおつこつて了ひます。

(三)ふし穴からのぞいて見ると、おばさんが前掛けをひろげてみんなうけてとつて了ひましてた。そして『春雄さんどうもありがと、ごちそうさま』と云ふとそばにゐたなゝちやんまでが『どうも、ごちちよちやま』とまねをします。又おばさんが『ほしければ、三べンまわつて、おじぎをしたら上げましよ』

僕はくやしいやら、うらめしいやらで、ぶん〳〵おこつて『おばさんのばかやアい』と、云ひながらおばさんが呼ぶのもきかずに歸つて來たが、くやしくてたまらない。するとふいとうまい考へが出て來ましたので、その日一日そのしたくに一生懸命で潮くこしらへました。

(四)あくる日又とりに行くとおばさんが昨日の樣にまへかけをひろげて待つてゐます。所が僕は畫にあるやうなしかけしてあるのでうまくあみの中へころころ入ります。おばさんは『まア、』と云つてあつけにとられて居ます。するとなゝちやんが、『春雄さんちよだいな』と云ひました。昨日の仇はこゝだぞと『ほしければ三べんまわつておじぎなさい』と云ふと、なゝちやんはきり〳〵三べんまわつて、ちよこんとおじぎしたので、僕はすつかりかわいくなつて『みんな上げよう』と云ひますと、おばさんが『ぢやこれから何日でも半分にしましよう。そのかはりいつでもとりにゐらつしやい』それですつかり仲よしになつて毎日とりに行きました。(ゐはり)

諸國

傳說童話

石塊島の話

藤澤　衛彥

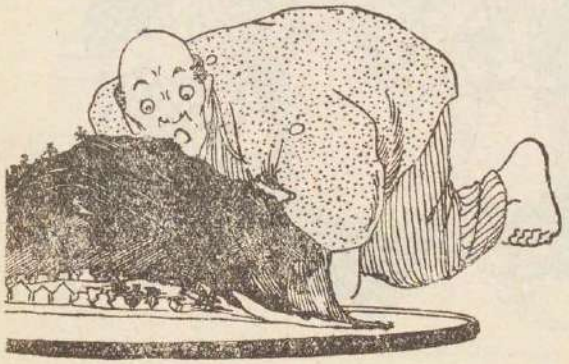
昔々、とある諸國行脚の六部が、近江國を通過して、橘長者のもとに、一夜の宿を求めました。長者は、よい話合手が泊り合したと、四方山の話の末に、そろ〳〵、我家の寶物の自慢話をはじめましたところ、六部は、突然、

『數ある、寶物のうちに、何ぞ珍らしい石塊はございませぬか』と、不思議な問を發しました。

『石塊の寶物なぞは無い』と、橘長者が申しますと、

『それなら、私のをお目にかけませう』と言つて、袋の中から、小い石塊を取出しまして見せました。

『これが何かの呪ひにでもなるのかね。』と、長者が驚くと、



『まあ、默つて見てゐらつしやい』と言つて六部は、それを傍のお盆の上にのせますとお盆一面に、急に霧が下りて、忽ち、石塊を取ちこめると見る間に、石塊の頂から黑雲が卷起り、雨が盆を覆すやうに降り注ぎました。これはとばかり、長者が不思議がつて見てゐるうちにやがて雨も收り、霧も晴れますと、盆の上には例の一個の石塊のみとなりましたが驚くではありませんか。其石塊の形はすつかり變つて、模型の島の遊となり、高い處には樹木が茂り、麓の方には人家も見えて、夜になると、火まで灯され出しました。

『もつと大きな盆はありませんか』と、六部の言ふ儘に、びつくりして、長者は我にかへり、乞はるまゝに盆を取寄せました。すると六部は、無雜作に、自分の石塊を取つて、大きな盆の方に移しました。と、見る間に、小い石塊は大きくなり、大盆にふさはしい位の盆石となりました。そのうちに、夜もだいぶ更けて、島の灯も、段々に消えて行きますので、六部も、

『ではお眺みなさい。もう御免蒙りませう。』と言つて、石をしまひました。盆石は、すぐと小くなり、盆の上には、今までの不思議のあとさへ見えませんでした。

橘長者は、其夜中、どうかして此不思議の石塊を手に入れたいものと考へまして、翌日、六部を調打にしやうとしました。六部は驚き防ぎながら、例の石塊を、表に投げて逃出しました。石塊は門石にぶつかり、二つに碎飛んで、一つは長者の袂に、一つは門の外に轉り出しました。轉り出した碎石からは、忽ち又霧が起つて、六部の姿は、その霧隱れに見えなくなつてしまひました。

橘長者の手に入つた片方の碎石は其後、時々、山になり、島になつて、頂には樹も茂り、麓には人家も見えましたが、どれもこれも、半分の樹や家で、滿足の樹や家は一つも出來ませんでした。そして、半分のせいか、直に樹は枯れ、家は倒れ朽ちて、間もなく、長者の碎石には、何の不思議も起らなくなつてしまひました。（近江の話）

試驗問題

沖野岩三郎

昔、朝鮮に名高い天子樣がありました。或晩服裝を平民の姿にやつして、唯つたお一人で町をあちらこちらと、お歩きになりました。

いつも宮中にばかり、おいでになる天子樣のお目には、夜の町が大層美しく不思議なものに見えました。面白い音樂と優しい言葉ばかりを聞き慣れてゐられる天子樣のお耳には町の人達が平作法に、ワア〳〵と話し合つたり歌つたりしてゐる有樣が大變面白く聞えました。

そこで天子樣は、宮中よりも平民の町の方が餘程面白いと思ひなさつて、其後度々御微行なさいました。

所が或晩の事、淋しい町の通りを、お歩きになると、小い家の中から變な聲で歌を唄ふ聲が聞えて來るのでした。

『先ア、何といふ下手な歌だらう？』と思ひなされた天子樣は、そッと戸の隙間から家の中を覗いて見ますと、不思議ぢやありませんか。廿五六歳の美しい女が、頭をクル〳〵坊さんにして、踊つてゐるのです。そしてその側で三十歳ばかりの男が、涙をぼろ〳〵流し乍ら悲しさうな聲で、面白可笑しい歌を歌つてゐました。

歌があんまり面白可笑しいので、男は泣笑ひをしてゐるのかと思つてよく〳〵見ますと、其側に一人の爺さんが、泣倒れてゐるのです。

不思議で堪らないから、天子樣は、默つて雨戸を引開けて入つて行きました。

『泣聲でそんな面白可笑しい聲を歌ふといふのは何故ですか。』

と、問うて見ました。

家の中に居た三人は、此のお客樣が天子樣だとは知らないが、何でも偉い人には違ひないと思つたので、爺さんが二人に代つて斯んな事を申しました。

『今、泣聲で面白い歌を歌つたのは、あれは私の息子です。そして、頭をクル〳〵坊さんに剃つて踊つてゐるのは息子の嫁です。私はもう二年も三年も難病に罹つて動けません。夫れに息子も近頃病氣の爲に十分に働けないのです。そこで嫁一人が一生懸命に働いて私達二人を養つて呉れてゐましたが、女の手一つでは、二人の病人を十分に介抱する事が出來ませんでした。所が今日髮屋さんが來て、此家の嫁の髪を見て、美しい長い髪だから賣らないかと申しました。嫁は私共に相談もせずに、あの通りに美しい髪を剃落して賣つて了ひました。お蔭で私共の藥代は十分に出來ましたが、偖、嫁が可哀さうだと云つて私が泣き出したので、息子は元來孝行な子ですから、私を慰める爲めに面白い歌を泣きながら歌つたのです。すると、嫁も私を慰める爲めに、あの通

り泣きながら面白い踊りを踊つて見せて呉れたのです。』

夫れを聞いた天子樣は此の息子夫婦の孝行な心を大變に感心なさいました。で、天子樣は斯う申しました。

『夫れは感心な息子だ、そんな孝行な人が此國の大臣になれば、嘸天子樣がお喜びになるでせう？』

『大臣樣に？』

と云つて息子も嫁も爺さんも眼を睜りました。

『えエ、大臣樣になつて御覽、丁度明後日の朝から大臣樣の採用試驗がありますから、あなたは夫れを受けて御覽なさい。』

『どうして〳〵、私は漸と手紙を書くだけが難しいのです。大臣樣の採用試驗などは……』といふ言葉の終らないうちに、

『いゝえ、先ア行つて御覽、試驗は案外易いもんですから。』

と云つて天子樣は、親切に受驗の事を勸めて置いて、其家を出て行かれました。

不思議な事もあるものだと思つた三人は、暫く默つて考へてゐましたが、

『受けに行つて見なさい、あれは屹度、神樣が人間に化けて、あなたの出世する事をお知らせに來て下すつたに相違ない。』と嫁さんが言ひましたので、爺さんも、

『行つて御覽、屹度及第するかも知れないよ。私も

三日目の朝、其の息子は、新しい着物を着て宮中へ出て行きました。

今日こそは俺が大臣になるのだぞ！　といふやうな顏をした受驗生が何百人もうつまつてゐましたのですが、さていよ〳〵試驗にとりかゝると、其の問題は、

親爺は泣く、
亭主は歌ふ、
女房は踊る。

といふのでありました。

多勢の學者は皆な首を捻つて考へて見ましたが、どの歷史の本にも、そんなことが書いてないので、宜い加減なことを書いて、みんな落第してしまひました。

しかし、此の問題に滿點を取つた一人の男がありました。（をはり）

今夜のお方は普通の人間ではないと思ふ。』と云ひました。

そこで

庄屋と鹿

昔、田舎に一人の庄屋がありました。庄屋といふのは今の村長ですから、村で一番偉い人でした。其の庄屋殿が一月一日に、新しい羽織を着て、立派な刀を腰にさして、隣村の庄屋殿の所へ年禮に行きました。

村と村との境に大きな山がありました。庄屋殿がその山をのぼつてゐますと、向ふからおほきな鹿が一疋、とつとつと此方へ駈けてくるのでした。

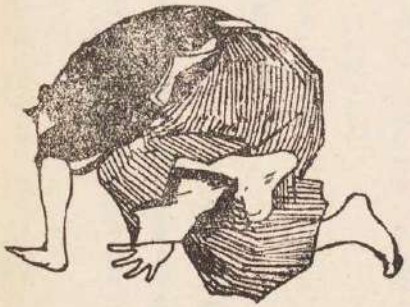
『旨い！　あの鹿を生捕つて隣村の庄屋の所へ年玉にしよう！』

斯う思つた庄屋殿は、いきなり鹿に飛びかゝつてその角を握りました。所が鹿はなか〳〵力が強くツて、うッかりすると庄屋殿が跳ね飛ばされさうになりました。

これではならないと思つたので、手早く羽織を脱いで鹿の頭へすッぽり被せました。

鹿は眼が見えなくなつたので、無闇にばたくりますから、最う致方が無いと思つて、庄屋殿は腰にさしてゐた正宗の刀を引拔いて、づぶり！と鹿の脇腹を刺しました。

不意に手傷を負はされた鹿は、びん！　と後足を上げて庄屋殿を蹴倒して置いて、すん



ずんと路を東の方へ駈けて行きました。

羽織と刀とを持つて行かれて了つた庄屋殿は、鹿の後を追かけて行きましたが、鹿の足は四本で庄屋の足は二本ですから、どうしても追ひつく事が出來ませんでした。

一里ばかりも、鹿の後を追かけて行きますと、向ふから隣村の百姓達が五六人、樂しさうに話し乍ら、こちらへ來るのに出會ひました。そこで、庄屋殿は叮嚀に頭を下げて、

『もうし〳〵、唯今此路を、羽織を着て、刀を腰にさした鹿が通りませんでしたか。』と尋ねましたが、百姓達は皆な、はゝゝはと笑つて何とも返事をしませんでした。

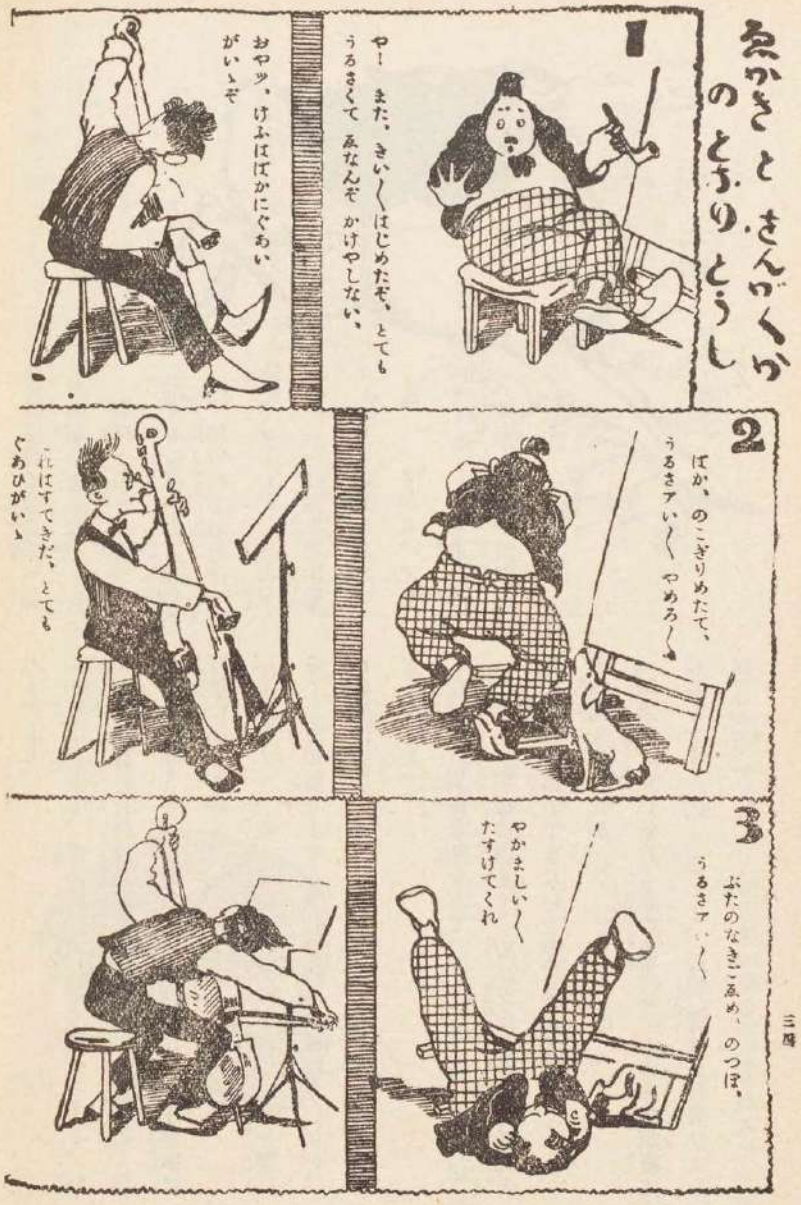
庄屋殿は眞赤な顏をして、

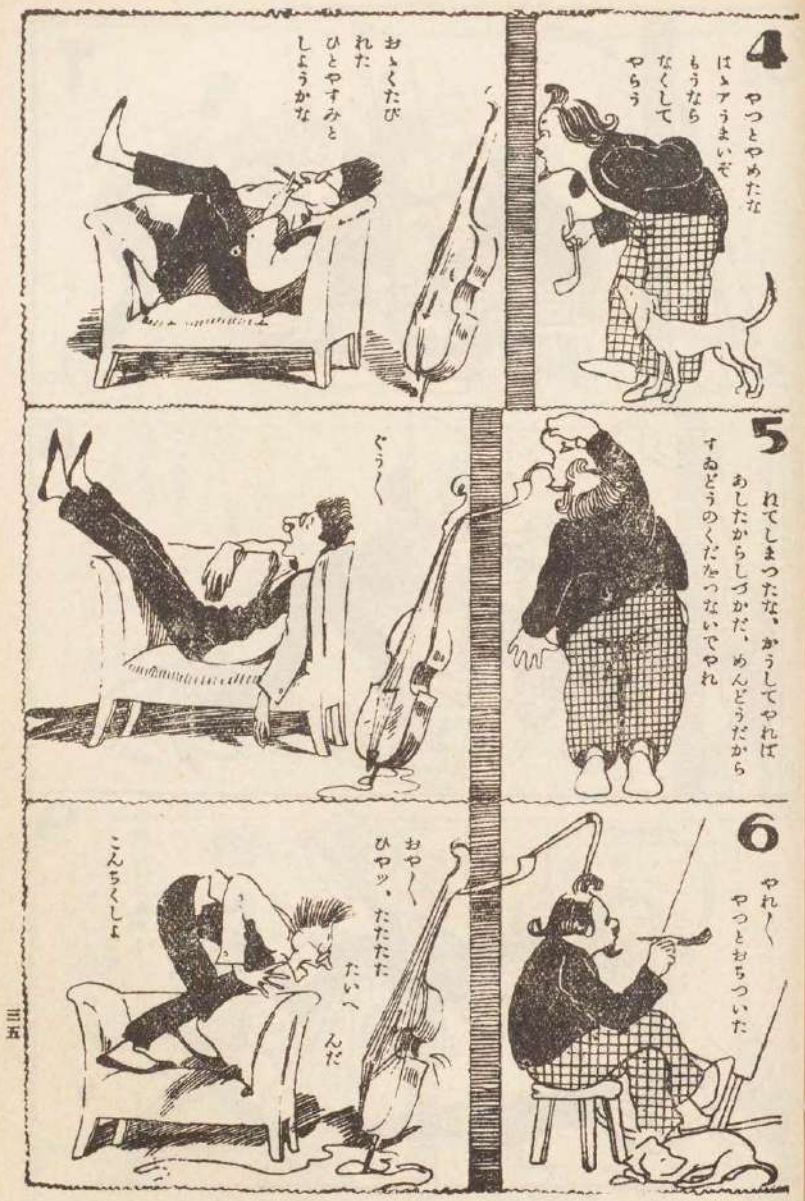
『馬鹿！　羽織は斜子で、刀は正宗だぞ。百姓共の身に着ける事のできないものだぞ！』

と呶鳴りましたが、

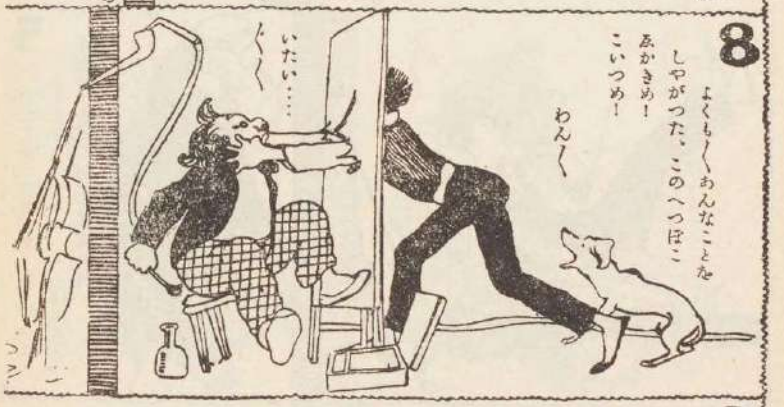
『百姓共の身に着ける事の出來ないものを鹿が着てゐるんですか。』と云つて、百姓達は又た笑ひました。（をはり）

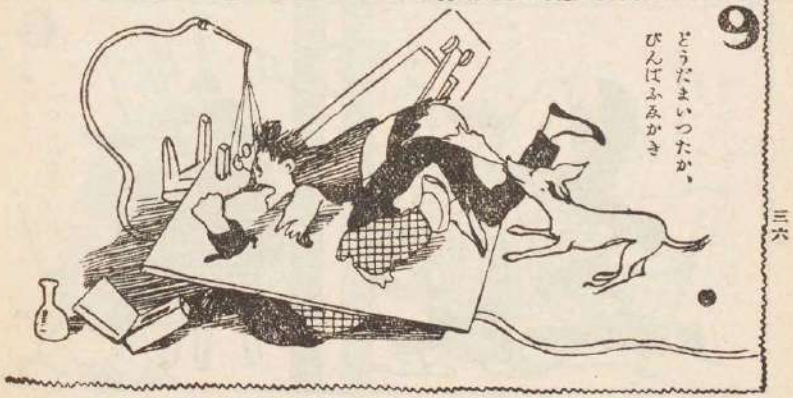
えかきと さんがくかのとぶり とうし



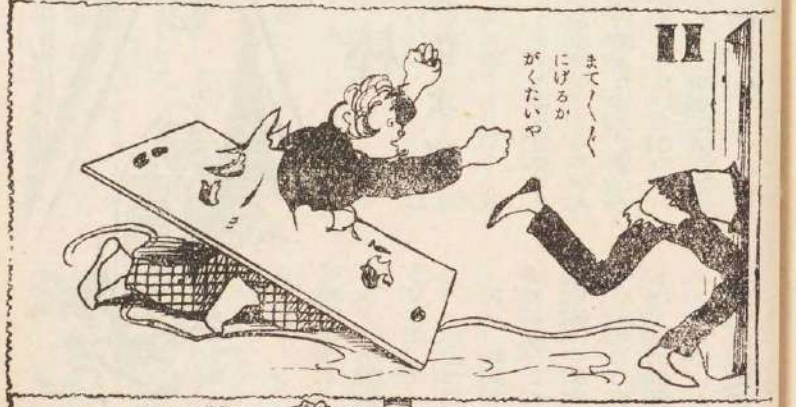


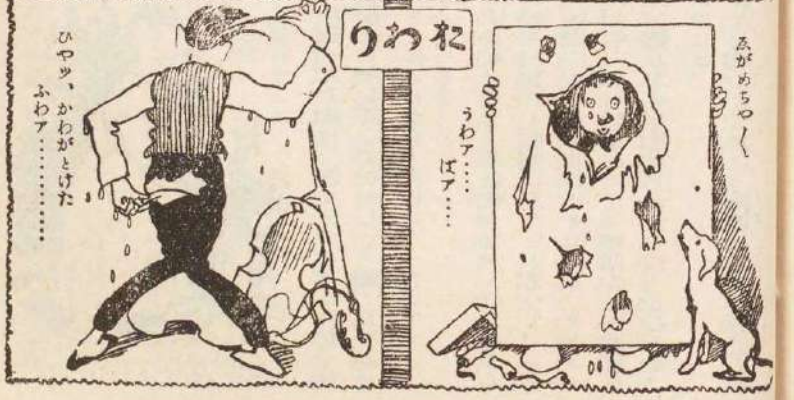
7
うんうん
どうするかこのやらう
みてろ


8
よくも〳〵あんなことを
しやがつた、このへつぽこ
あかきめ！
こいつめ！
わん〳〵
いたい……
く〳〵


9
どうだまいつたか、
びんぼふふかき

10
なにかッ　まけるもの
かい
このがくたいやめ
どうだ
あやまれ
どうだこいつ
いたい
く
なにをこのペンキやの
ふとつちよめ、ぶッぶッ……
よくもあぶらをふつかけたな


11
まて〳〵〳〵
にげるか
がくたいや


あがめちやく
うわア……
ばア……
りわね
ひやッ、かわがとけた
ふわア……

二人の泥棒

齋藤佐次郎

一

いつか「羊の僞物」といふ題で、フランスの片田舎にチュエノといふ惡少年のゐたお話をしましたね。そのチュエノが、あれからどんな人間になつたか、聞きたい人がきつと澤山ありましたでせう。實は私も是非知りたいと思つて、いろ〳〵の本をしらべて見たところが、この頃になつて、やう〳〵分りました。あの後が實に面白いのです。あんまり面白いので、自分一人で藏つて置くのがもつたいなくなつて、あの後を書いて見る氣になりました。騷くぢやありませんか、チュエノはあれから大泥棒になつたのですよ。

二

さて、お話をはじめませう。あの後チュエノのお母さんはどうかしてチュエノをいゝ小供にしたいと思つて、一生懸命働いて學校へ通はせてゐました。そのうち、チュエノもいゝ年ごろの少年になりましたから、お母さんは學校を下げて何か商賣を覺えさせる積りでゐました。ところが、チュエノがいふのには、

『自分は商賣なんか覺えたくない、泥棒になるんだ。』といつて、きかないのでした。

お母さんはがつかりしてしまつて、ある日のこと、占者の所へ見てもらひに行きました。

『お前さんの息子は今に大變な出世をする。だが、最後が甚だよろしくない。お城の崖の上から吊者にされて命をとられる。』

かう占者がいつたので、チュエノのお母さんはびつくりしてしまひました。何故かつて、その頃のフランスでは國の掟として、大泥棒をした者は、兩足をくくられて、王樣のお城の高い〳〵崖の上から眞倒樣に吊下げられて、岩の上へ突落して殺されるのでしたから。

チュエノのお母さんは、泣き〳〵歸つて來ました。

『あの兒はまだ年がいかないのだから今のうちにどうにかしたら、泥棒にもなるまい。』そう思つて、お母さんは前よりも一層チュエノの事を氣にしてゐました。

ある日のこと、村のお寺で坊さんのお說敎がありました。チュエノのお母さんは是非チュエノにも聞かせたいと思つて、一しよに來るようにといひました。けれども、チュエノはくす〳〵笑つてゐて、自分はお說敎なんか大嫌ひだといひました。

『その代りネ、お母さん、今日はかういふ事を約束しますよ。私もネ、これから眞面目になつてお母さんにも安心させたいから、お母さんがお寺の歸途で一番はじめに聞いた名の商賣を一生涯やる事にします。』

そうチュエノがいひました。そこでお母さんはほく〳〵して一人でお寺へ出かけました。

三

チュエノは家にゐて寢ころんでゐました。が、もうそろそろお說敎がおしまひになる頃だと思つたので、お寺の傍の藪の中へ行つて隱れました。

何にも知らない母親は、お坊さんから聞いた有難いお話を思出し思出しいゝ氣持ちになつて村の一本道を自分の家の方へと歩いて來ました。と、突然、傍の藪の中から、

『泥棒……泥棒……泥棒』

と、叫ぶ聲が聞えました。

チュエノのお母さんは、びつくりして飛あがりました。

しかし、あたりを見廻しましたが、何にも出て來る樣子がないので、ほつと安心してまた歩き出しました。

『泥棒』とどなつたのは、いふまでもなくチュエノです。しかし、自分だと氣づかれてはいけないと思つて、わざと作り聲をして叫んだのでした。

間もなく母親が角を曲つて見えなくなつてしまつたので、チュエノはこそ〳〵藪の中から出て來ました。それから自分は、母親よりも先きに家へ歸つてゐなければならないので、森の中の近道を抜けて駆け出しました。

母親が家へ入つた時には、チュエノは火の傍に大の字になつて寢てゐました。

『お母さん、何かいい事を聞いて來たかい。』

チュエノはのこ〳〵起上つて、いひました。

『いゝえ、何も聞かなかつたよ。何しろお寺を出てから誰にも遇はなかつたからね。』

『それでは誰れも何かの商賣のことをいはなかつたかい。』

チュエノは、わざとがつかりしたやうな樣子をしました。

『あゝ』と母親は答へましたが、ふと思ひ出したやうに、

『あゝ、そういへばネ、藪の傍を通つた時、泥棒、泥棒、泥棒、といつたのを聞いたよ。だけど、たゞそれだけだつたよ。』

『あゝ、それだけで澤山だ。僕がお母さんに話したぢやないか。それがネ、僕がこれからなるといゝ商賣なんだよ。あゝ僕は泥棒になればいゝのだ。』かうチュエノがいつたので、お母さんは涙をほろ〳〵落して、

『それでは、お前はお城の崖から吊されて死んでもいゝのかい。』といつて、泣出してしまひました。それからその晩は一と晩中、チュエノの行末の事ばかりを考へて夜をあかしてしまひました。

四

たうとうチュエノのお母さんは決心しました。

『あの子がどうしても泥棒になるように生れついてゐるのなら、一層のこと、小泥棒になるより大泥棒になつたがいい。誰か泥棒の術を教へてくれる人がないかしら。』そう思つて、考へてゐる内にふと思ひついた事があつたので、ある日のこと、まだ夜のあけないうちに家を出ました。

チュエノの母親は、そのころ「禿鷹」といふあだなをとつた大泥棒の家へ行つたのです。この大泥棒は隨分いろんな人から物を盜みましたが、誰一人捕へる事が出來ないといふ不思議な泥棒なのでした。

『お早うございます。』チュエノのお母さんは、「禿鷹」の家へ行つてかういひました。「禿鷹」は丁度いゝ工合に家にゐました。

『私の伜が是非あなたの御商賣を覺えたいといつてゐますので、どうかお弟子にして下さい。』かういつて母親が頼みました。すると「禿鷹」は、

『利巧な子なら弟子にしてやつてもいゝ。』と、答へて、こんな自慢話をしました。

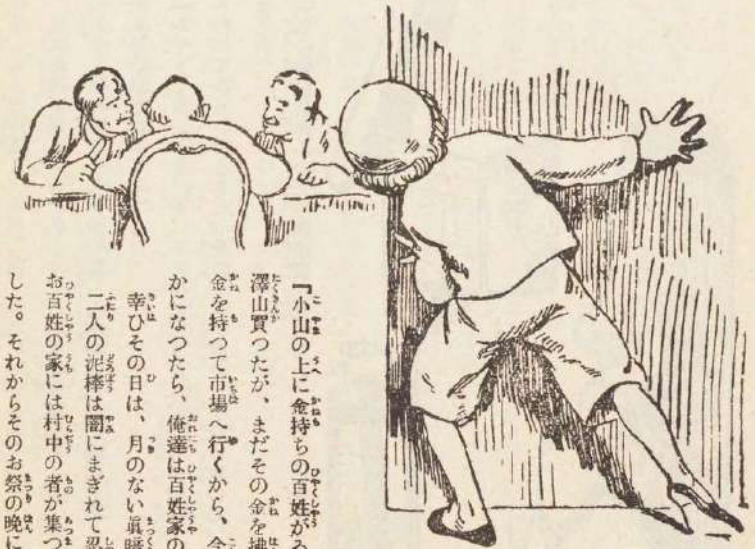
『まァ何といつても第一流の泥棒に仕込める者は俺ぐらいの者だからな。だが、馬鹿な子ぢやァ到底この商賣には向かないよ。』

『いえ、どういたしまして、伜は馬鹿どころか利巧過ぎるのでございます。今晩、暗くなりましたら、早速つれて參ります。』

チュエノの母親は溜息をつきつきいひました。

チュエノは母親から「禿鷹」が承知してくれた話を聞くと、とび上つて喜んで、

『僕はフランス中で一番の泥棒になるから、お母さん安心して



おくれ。」といひました。母親はがつかりしてゐて、「しまひの果はお城の廐で死んぢやないかい。」といつては、溜息をつきました。

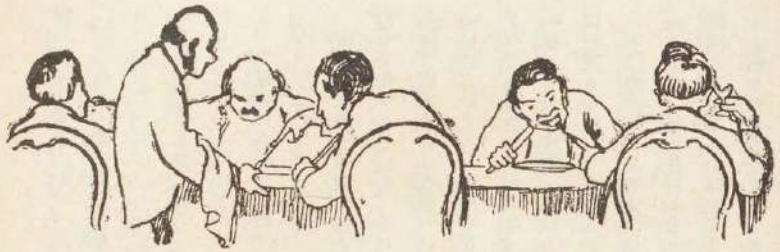
それから毎晩、チュエノは「禿鷹」の家へ行つて、いろいろ泥棒の術を致りました。そのうち、だん〳〵巧くなつたので親方の「禿鷹」と一しよに出かけて、見張りの役をつとめる處までこぎつけました。それが、たうとう終ひには、「禿鷹」が大きい泥棒の手助けに連れて行つても一ばし役に立つと許すほどになつたのでした。

ある日のこと「禿鷹」がいひました。

『小山の上に金持ちの百姓がゐる。その百姓は自分の羊をみんな賣つて、代りに痩せた牛を澤山買つたが、まだその金を拂はないで、そのまゝ手に握つてゐるのだ。だが、明日はその金を持つて市場へ行くから、今夜のうちに行つて、奪つて來なくてはならない。あたりが靜かになつたら、俺達は百姓家の物置小屋へ忍び込むのだ。』

幸ひその日は、月のない眞暗な晩でした。

二人の泥棒は闇にまぎれて忍びこみました。ところが、その晩は、その邊のお祭なので、お百姓の家には村中の者が集つて、お酒を飲んだり、歌をうたつたりして大騒ぎをしてゐました。それからそのお祭の晩には胡桃を食べることになつてゐるので、お酒を飲まない者は



胡桃を割つて食べてゐました。

こんな有樣なので、だれ一人寢に行く者がないので、物置小屋にかくれてゐた小泥棒のチュエノは待ちくたびれてしまひました。でも親分の「禿鷹」はさすがに大泥棒だけあつて、こんな事にはなれてゐますから枯草の上にどつかり寢轉んで、チュエノに、村の男どもが歸つて行つたら、起してくれといつて、眠つてしまひました。

しかし、チュエノは我慢が出來ないものですから、となりの牛小屋の方へ忍んで行つて見ますと、痩牛どもが、一疋々々身體が自由にならないように、首の綱を堅くいはかれてゐました。これは面白い事になると思つた、チュエノは早速、綱をみんなゆるめてしまひました。

牛どもは、身體が樂になりましたから、お互ひに蹴り合つたり、床をとん〳〵踏みならしたりして、大騒ぎをはじめました。その物音に驚いた家の中の人達は、大勢牛小屋の方へとんで行きました。

待ち構へてゐたチュエノは、その間に母屋へ行つて、食べ散らしてあつた胡桃を一つ殘らず盜んで來ました。

歸つて來ても親方の「禿鷹」はまだぐう〳〵眠つてゐました。で、チュエノは、自分も寢て待たうといふ氣になつて、一寸横になりましたが、ふと、「禿鷹」の寢てゐる傍の壁に大きな牛の皮が掛けてあるのが目に入りましたから、これは面白いと思つて、すぐさま起上りました。チュエノはポケットから大きな針と絲を出して、「禿鷹」の着物のへりを牛の皮に縫ひつけてしまつたのです。その間に牛小屋では牛をもと通りにしたので、お百姓たちは元の部

屋へ歸つて來ました。

ところが、來て見ると胡桃が一つもないので、

『おや、どうしたんだらう。どうしたんだらう。』

と、大騒ぎになりました。

五

物置小屋の中ではチュエノが『胡桃を割つて食べよう。』と、ふいにいひ出しました。寢てゐた「禿鷹」は驚いて起上り、

『いけない〳〵、母尾へ聞えるぢやないか。』と、叱りました。でもチュエノは聞かずに、

『構ふもんですか、私はお祭の晩に胡桃を食べなかつた事は一度もないんです。』といつて、一つカチンと割りました。

ところが、母屋の方では突然一人のお百姓が、

『おやッ、誰か胡桃を食べてゐるぞ。』と、いひ出したので家中の者が耳をそば立てました。すると、また一つ、カチンと殼を割る音がしました。

『たしかに物置小屋の方だ。誰かゐるのだから、皆で見て來よう。』

お百姓の一人が大きな聲でいひました。

耳ざとい「禿鷹」にはすぐとそれが聞えましたから、あはてゝ小屋から飛出ましたが、チュエノが惡戯をしてあるので、ずる〳〵〳〵牛の皮をひきずり〳〵逃げて行きました。

『おやッ、俺の牛の皮を盗んで行くぞ。』と、主人の百姓がどなつたので一同の者はわァッと鬨の聲を擧げて後を追ひかけました。しかし、大泥棒の「禿鷹」のことですから、到底

お百姓たちの追ひつけるわけがありません。そのうちに、「禿鷹」は牛の皮をもぎとつて、野兎のやうにすばやく、自分の住家へ逃げ戻りました。

この間隨分ながい時間がかゝつてゐました。そこでチュエノはまたのそ〳〵母屋へ出かけて行つて、部屋中を探し歩いてたうとう金箱を目つけ出しましたから、さつそくそれを背負つて、どん〳〵逃げました。

夜あけごろになつて、チュエノは親分の家へ着きました。

「禿鷹」は頭から湯氣を立ててどなりました。

『このやつ、よくも俺をひどい目にあはせたな。』

しかし、チュエノは平氣な顏で、

『親方、巧く行きましたよ。この通りです。』

といつて、盗んで來た金箱を見せました。

『おや〳〵、お前の方が上手なんだネ。』

先づ「禿鷹」のおかみさんが感心してしまひました。そこで、「禿鷹」もすつかり感心して、

『全くお前の方が上手だ。』

といつて、氣嫌を直して、盗んで來たお金を半分づゝチュエノと分けました。

六

それから五六日たつての事、泥棒たちはこの近所にお嫁入りのあることを聞きこみました。その家はいゝ家柄の家でしたから、方々からお祝物を持つて行きました。

隣村に大金持ちの百姓がありましたが、この百姓もお嫁入りの祝に何かやりたいと思つて考へてゐましたが、新しく家を持つひとには羊をやるのが一番重寶だと思ひました。そこで牧場へ下男を使ひにやつて、一疋だけ親羊を牽いて

来るやうにといひつけました。下男はさつそく牧場へ行つて、中で一番大い、太つたのを一疋目つけ出しましたが、家までは大變道のりがあるので、羊の兩足をくゝつて肩にかついでやつて來ました。

その日、チュエノは親方の「禿鷹」の家へ行かうと思つてそこを通ると、羊をかついだ下男に出あひました。

下男は羊が重いので、ゆつくり〳〵歩いてゐますから、その間にチュエノは駈けて行つて親方のところへ行きました。

『親方、御覽なさい、あそこを羊をかついだ男が行くぢやありませんか。私はあの羊を盗んでやるつもりです。』と、チュエノがいふと「禿鷹」はクス〳〵笑つて、

『お前にあれが盗れたら百圓のお金をかけるよ。』と、いひました。そこで、二人は百圓のお金をかける事にして、チュエノは近道を抜けて、先廻りをしました。

チュエノは、それから自分の靴を片方ぬいで、泥を一ぱいなすりつけ、道の眞中へ投出して置いて、自分は岩の蔭にかくれて待つてゐました。

ぢきに下男がやつて來ました。落ちてゐる靴を見て、下男は立止つて拾上げて眺めてゐましたが、

『い、靴だなァ、だが大變汚れてる。もう片方あるといゝなァ。』と、惜しそうにいつてゐましたが、片方ぢや仕方がないとあきらめたか、ポンと捨ててまた歩き出して行つてしまひました。そこで、チュエノは岩かげから出て、タスクス笑ひ〳〵靴を拾ひあげて、今度もまた近道を抜けて先廻りをして、もう片方のきれいな靴を道の眞中に落して置きました。間もなく下男がのそ〳〵やつて來て、落ちてゐる靴に目を据ゑました。

『おや〳〵、これはさつきの汚い靴のお仲間だな。』といつて、考へてゐましたが、

『惜しいもんだから戻つて行つて、もう片方拾つて來よう。い、靴が一足出來る。』下男はにこ〳〵して、かついでゐた羊は草の上に下してもう片方を拾ひに戻つて行きました。

待ち構へてゐたチュエノは落して置いた片方の靴も自分ではいてしまひ、おまけに下男が置いて行つた羊までさらつて、とつとと逃げました。

親方の「禿鷹」はたうとう賭にまけて、百圓とられました。

七

下男はその晩家へ歸つて、主人に途中の出來事を話しました。と、主人は大變に怒つて、『お前は大馬鹿の薄のろだ』といつてさん〴〵叱りました。しかし、外に仕方がないので、もう一度牧場へ行つてこんどは小羊をつれて來いといひつけました。

チュエノは、その翌日も森にかくれて見張りをしてゐますと、下男が小羊をかついで傍を通りましたからめい〳〵めいと親羊のやうな啼聲を立てました。それがほんとうに羊の聲のやうだつたので、下男は立止つて、

『おや〳〵、昨日見えなくした羊が道に迷つて啼いてゐるのだな。』と、考へました。

下男はかついでゐた小羊を草の上に下して、啼聲のした方へ急いで行きました。そこで、チユエノはまた、まんまと小羊を盗んで「禿鷹」のところへ歸りました。

下男は眞青になつて、暗くなるまで森の中をあつちこつち探し歩きましたが、親羊はむろんのこと、小羊さへ目つからないので、家へ歸つて、昨日と同じことをもう一度主人に話しました。主人は火の樣になつて怒つてゐましたが、しまひにあきらめて、明日もう一度行つて今度は牡牛をつれて來いといひました。しかし、こんど奪られるやうなら、もうお前を家へは置かないからそう思へといひました。

チユエノは今度もまた、下男が大きな牛をひいて行くのを目つけましたから、急いで親方の處へ行つて、

『早く森へ來て下さい。牛を盗むのですから。』と、いひました。『だが、どうやつて盗るつもりだい。』と「禿鷹」がきゝました。

『なアに譯はないんです。あなたは、あそこに隱れて親羊のやうな啼聲をして下さい。すると、私は外の方角で小羊のやうな聲を出しますから。そうすればきつと巧く行くのです。』さういつて、二人の泥棒は出て行きました。

八

のろまの下男は牡牛をひいて、ゆつくり〳〵歩いて來ました。ふいに向ふの藪のかげで親羊の啼聲がしました。そうかと思ふと、方角違ひの方で小羊が、それに答へて啼いてゐるのが聞えました。

『おや〳〵、あの啼聲はたしかに私が失くした親羊と小羊にちがいない。そうだ、たしかに違ひない。』そう獨りできめた下男は、すぐさま牛を傍の樹にくゝりつけて、藪の中へ羊を探しに行きました。そうして、疲れるまで森中探し廻りました。言迄もなく二人の泥棒は、その間に牛をさらつて行つて其晩の御馳走に食べてしまつたのです。

ある日のこと、二人の泥棒は懷へ澤山のお金を入れて、市場からの歸途に丁度丘の上に立つてゐる絞首臺の傍を通りかゝりました。さて、二人の泥棒はこゝでどんな事に出遇ふでせうか。（つゞく）

雨がふる

内藤豐雄

そこいら中に雨がふる
野にも木にも雨がふる
そら、洋傘へも雨がふる
海の舟へも雨がふる

（スティブンソン）

坊やが大人になつたらば

内藤豐雄

坊やが大人になつたらば
立派なゑらい人にならう
そしてほかの子供等に
坊やの玩具をさはらせまい

（スティブンソン）

インドイソップ物語 1

兎の贈物

楠山正雄

或山の中に猿と狐と兎が棲んでゐました。みんな獣の醜い姿を恥づかしがつて、どうかして生きてゐる間に人にいゝ事をして、樂しい佛樣の國に生れ變りたいと願つてゐました。

天の神樣がこれをお聞きになつて、或時よぼ〳〵に痩せ衰へた乞食のおぢいさんの姿で獣達のゐる山の中に出ておいでになりました。獣達は氣の毒がつて、猿は木上りをして栗や柿の實をもいだり、林へ出て棗の實やあけびの實を拾つて來ますし、狐は里へ出てお米やお魚をとつて來て、可哀さうなおぢいさんを養つてやりました。

その中で兎だけは人一倍心のやさしい獣でしたから、どうかしておぢいさんを喜ばしてやりたいと思つて、山奥へ行きますと狼や熊が出て、おどかしました。野へ下りると、人間の子供に見つかつて追つかけまはされます。一日歩きまはつて椎の實一つ拾へずに、がつかりして、くたびれきつてぼんやりかへつて來ますと、猿は森から木の枝を拾ひ集め、狐は

神樣のお社の火をとつて來て、焚火をこしらへて、おぢいさんを暖めてやつてゐました。

兎の顔を見ると、猿と狐は口をそろへて、

『兎さん、兎さん、大層帰りがおそかつたね。定めてたくさん獲ものがあつたらう。こゝへお出し。焚火で焼いて温めて、おぢいさんに食べさせてやるから。』と云ひました。

兎は恥かしさうに、獲物のなかつたわけを話しますと、猿と狐は、てん〳〵面白さうに『兎のいくぢなしやあい』といつて囃しました。おぢいさんは悲しさうな目をしてぢつと兎の顔を見てゐました。これを見ると兎は堪らなくなつて、涙をこぼしながら、『おぢいさん、私があなたに上げられるのはこれだけです。どうかわたしを食べて勘忍して下さい。』といひながら、ひよいと躍上がつてどん〳〵真赤にもえさかつてゐる焚火の中にとび込みました。一番いくぢのない兎は、自分の命を捨てゝ、おぢいさんを助けようとしたのです。

おぢいさんの神樣は一ぱん兎を可哀さうにお思ひになつて、月の中に生れ變らせておやりになりました。ですから今でも月の中には兎が火にとび込んだ時の形のまゝで殘つてゐます。そして月の中にもや〳〵雲のやうなものゝ見えるのは、この時の煙だといふことです。

鏡國めぐり（長篇童話）

西條八十

十、ガラ〳〵合戰

だしぬけに、さも驚いたやうな叫聲をたてたダムは、あやちやんの手くびをギュッと握つて、

『おまへあれを見たかい？』

と訊きました。情に迫つて聲がくもり、二つの目は急に大きく、黃ろく、まんまるくなりました。そのぶる〳〵ふるえる指ききは、むかふの樹の根がたに落ちてゐる何やら白い物を指さしてゐました。

『あれはガラ〳〵のお菓子よ。なにも怖いもんぢや無くつてよ。』

と、あやちやんはよく見さだめてから、なだめるやうにダムに言ひました。

『さうさ、それはきまつてる！』

と、ダムは答へて、ひどく亂暴にぢだんだを踏み、さもくやしさうに頭の髪をかきむしりながら、

『誰かあのはじをこはした奴があるんだ！』

と、どなりました。

言はれてあやちやんが見ると、なるほど赤と白との皮で毬のやうに兩方から合せたガラ〳〵の端に、ポッンと穴が明いてゐました。

『さあ、もう了簡がならないぞ！』

と、ダムはもう一べんどなつて、ヂロリとヂーの方を見ました。ヂーはなんだかひどく慌てゝ、ベタリと地べたへ尻もちをつき、そこにあつた古い蝙蝠傘をひろげて、急いでその下にかくれようとしました。

あやちやんはダムの肩に手をかけて、賺すやうに

『ガラ〳〵一つぐらゐのことでなにもそんなに怒らなくつてもいゝぢやないの。』

と、云ひました。

『ガラ〳〵一つぐらゐだつて！　たとへガラ〳〵だつてあのガラ〳〵はほかの有りふれたガラ〳〵とは違ふんだ。』

と、ダムはます〳〵猛りたつてどなりました。

『七年まへに買つてきてから今日まで、おいらはどんなにあれを大切にしてきたか、わかりやしないんだ。紙のふくろへ入れて、その上をハンケチで包みそのまた上を風呂敷で包み、そのまた上を毛布で包み、そのまた上を絨毯で包み、そのまた上を——』

と、言ひかけて、ダムは一寸度わすれしたやうに首をかしげて考へました。

『兄貴！　鷹だよ！　鷹だよ！』

と、うしろからヂーが聲をかけて敎へました。あや

ちやんがふり返つてみると、ヂーはすつぱり頭から蝙蝠傘をすぽめてかぶつてまるで藁によの化物みたいな恰好をして立つてゐました。

『さうだ、その叉上を藁で包んで、大切に大切にこはれないやうにしてきたんだ。それを今日あんまり天氣がいゝもんだから久しぶりに土用干に出したらあんたにこはされてしまつたのだ。このまゝにして置いては、おいらの男が立たないぞ！』

と、こゝまでくると、ダムは有りつたけの金切聲をはり上げました。さうして後をむいて、

『もちろん、おまへはおいらと勝負をする覺悟だらうな。』

と、すこしおだやかな調子でヂーに言葉をかけました。

『そりやしてもいゝが——』

と、ヂーはしぶ〳〵返事をして、蝙蝠傘の下から匍ひ出しながら、

『それにしてもその娘に手傳つて鎧を着せて貰はなくちや』と、云ひました。

そこで二人の兄弟は手を引き合つて森の中へ入つて行きましたが、間もなく、枕だの、毛布だの、絨毯だの、テーブル掛だの、布帛だの、炭とりだの、いろ〳〵な品物をどつさり兩腕に抱へ込んで出て來ました。

『おまへさんは、女の子だから、きつとピンでとめたり、絲で縛つたりすることがうまいだらう。さ、これを殘らず一つびとつおいらたちに着せておくれ。』

と、ダムが云ひました。

あやちやんはそれから云はれた通り、この二人の兄弟に、いろ〳〵な品物を着せて、勝負の支度をさせてやりましたが、この時ぐらゐ目のまはるほど忙しく、まばか〳〵しい思ひをしたことはありませんでした。なにしろ二人は子供のやうに始終ムグムグ動きどほしですし、それを捉へて置いて、いろいろな品物を身體につけたり、絲で括つたり、ボタンをはめてやつたりするのは、なみたいていの骨折ではありませんでした。

十一、鴉だ！　鴉だ！

『これですつかり出來上つたらどんな風になるんでせう。まづ一ばん古着の包に似てゐるでしようね。』

と、あやちやんはヂーの頸のまはりに枕を結ひ付けてやりながら、さう思つてをかしくなりました。ヂーの方ではそんな事には一向おかまひ無しで、

『今に見ろ、あいつの首と胴とを離れ〳〵にしてやるから。』

などゝ威張り返つてゐました。それから、ひどくまじめな顔になつて、

『ねえさん、戰爭でいちばん大切なことは、相手の首をうまくスパリと斬ることなんだよ。』

と、つけ足して云ひました。
あやちやんはこれを聞いて思はずブッと噴きだしてしまひました。けれども、おこらせてはいけないと思つて、あわてゝその半分を咳にまぎらせました。
『どうだ。おいらの顔はよつぽど青いかい？』
と、兜をかぶせてもらひにやつて來たダムが訊きました。ダムが兜だと云つてゐるのは、見ると一枚の鐵鍋でした。
『えゝ——さうね——すこしばかり。』
とあやちやんが、優しく返事しました。
『いつたいふだんならおいらは非常に強いんだが——』
と、ダムは聲を低めて、

『今日はあいにく頭痛がしていけない。』
『おいらも今日はさつきから齒が痛んでゐるんだ。お前から見るとおいらの方がよつぽどわるいよ。』
と、ダムの話を聞きつけたヂーが言ひました。
『ぢやあ、あんたたち今日は戰爭をしない方がいゝぢやないの。』
と、あやちやんは、こゝでひとつ二人の仲直りをさせようと思つて云ひました。
『イヤどうしても少しは戰爭をやらなければならんだがさう大して長くやらんでもいゝのだ。』
と、ダムが云つて、
『ところで今何時だ？』
ヂーは時計を出して見て、
『四時半だよ。』
と答へました。
『では六時迄勝負しよう。それから夕飯にしよう。』
と、ダムが云ひました。
『それがいゝ。』
と、ヂーはどこか悲しさうに答へて、
『それからこの娘は見物して、もいゝ。だがあんまり傍へ寄つちやいけないよ。おいらはいよ／＼本氣になると、何でもかでも手當り放第そこら中へぶつけるから。』
『それから、おいらは目をつぶつて、何でもぶつかつたものをドン／＼ぶん撲るよ。』
と、ダムが續いて云ひました。
あやちやんは笑ひだして、
『それぢやあ、きつと二人で樹ばかり打つてることでしようね。』
と、云ひました。
ダムはさも得意さうにニコ／＼あたりを見廻して
『さうさ、戰爭の濟んだ時分には、この邊には一本

も樹が殘つてゐまいと思ふよ。』

と、云ひました。

『それがたつたあのガラ〳〵一つのことでねえ。』

と、あやちやんは改めて云ひなほして、そんなつまらないことから喧嘩をすることを、ふたりに氣まりわるく思はせようとしました。

『もしかあれが並のガラ〳〵だつたら、おいらはこんなに氣にしやしないんだ。なにしろ七年まへのガラ〳〵なんだからなあ。』

と、ダムはそれでもやつぱり頑ばつてゐました。

『おい兄貴、あいにく劍が一本しきやないせ。おまへはその蝙蝠傘を持つがいゝよ。ちやうどいゝかげんに尖がとんがつてゐるから——』

このとき、長い奇妙な劍を右手に握つて、すつかり身支度をしたヂーがかう聲をかけました。

『よゝし！　それでは早く始めよう。なんだかだいぶん暗くなつてきたから。』

ダムはそこに落ちてゐた蝙蝠傘を拾ひ上げ、勢よく躍り出して、

『サア來い！』

とばかり見がまへをしました。

耳のところまでふかく鐵鍋の兜をかぶり、身體ぢうには鎧のかはりにいろ〳〵なものを、身動きも出來ないほどグル〳〵巻きつけ、お腹には枕を、背なかには妙な板ぎれを結ひつけた二人の兄弟が、五六歩はなれてヂッと向ひ合つた姿は、奇體ともふしぎとも、何とも云ひやうのないをかしな有樣でした。

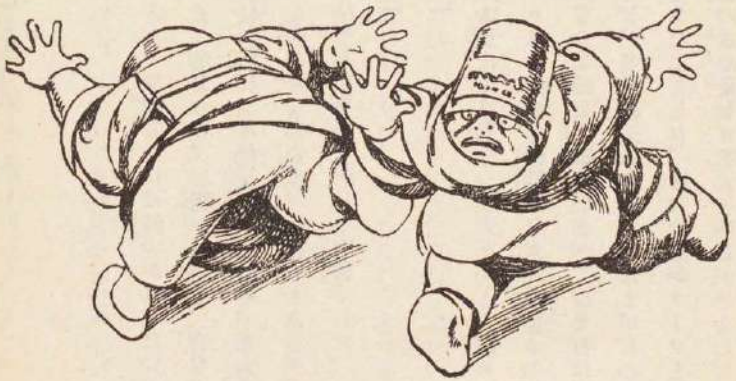
『ヨウ！』

『ヨウ！』

ふたりは互にかけ聲をしてヂリ〳〵と詰めよりました。ダムはすぼめた蝙蝠傘を大上段にふりかざしヂーは變てこな劍を星眼にかまへてゐました。

このとき、どう云ふ工合か、あたりがだん〳〵うす暗くなりだしました、冷たい風がサーッと吹いてきて、森の木の葉をガサ〳〵ゆるがせました。

『夕立でもくるんぢやないかしら。』
と、あやちやんは空を見あげました。見ると空には眞黑な雲がおそろしいほどいつぱい湧いてゐました
『なんて黑い雲でしよう！　そしてまああの早く飛んでくること！　ちよいと、ご覽なさいよ、あれあれあの雲には翼があることよ！』
と、あやちやんが叫びたてました。
『ヤ、ヤ、鴉だ！　鴉だ！』
ダムがこのとき、おびえたやうな金切聲をあげました。
『そいつは大變だ！』
ヂーがつゝいて、持つてゐた劍をはふり出してわめきました。さうして、なんでさう鴉がこはいのかあやちやんが訊くひまもなく、二人の兄弟は一目散に逃げ出して、忽ちその姿はどこへか見えなくなつしまひました。（つゞく）



ラムシニトス王の寶の話

長尾　豐

一

昔、埃及にラムシニトスといふ王樣がありました。大層なお金持でしたが、お金持によくある慾張な性分で、人民達からとれるだけのお金を取らうとしました。そしてお金が入れば入るほど、もツと澤山欲しくなりました。

間もなく御殿の中は金銀で一杯になり、その上にもまだ毎日家來がお金を運んで來ますから、終ひには何處へ置いたらばよいか、王樣にも分らなくなる程でした。王樣はこの澤山の寶を、何處へ隱したらよからうかと夜晝心配の絶えた事はありません。何時、盜賊が來て持つて行くかと思へば、氣掛で夜も眠られず、晝もオチ〳〵休んではゐられません。

そこで一人の石工を呼んで、御殿の隅へ別に一軒家を建てさせました。その家といふのはすつかり石造りで、窓は一つもなく、入口もたつた一つだけ開いてゐる、頑丈な大きな家でした。又その戸口には大きな鐵の門が掛り、丈夫な鉸前が下りるといふ、まことに用心のよい建物なのです。家が出來上ると、王樣は寶をソツとその中へ隱し、先づ周圍の壁には

金銀、紅玉、金剛石、眞珠、碧玉なんどの一杯入つた壺を置列べ、また眞中の空所には、金貨を山のやうに積上げて置きました。そのピカ〳〵キラ〳〵光ること、いつたら、この石造りの部屋も光輝く位でした。

『さて〳〵、これで仕合者になれたぞ。』

と王樣は安心して、その晩からは枕を高くグツスリ眠る事が出來ました。かうしてしまへばもう取られる氣遣ひはないと思つたからでした。

ところがこの石造りの家を建てた石工が、それから間もなく病氣になりました。年を取つた石工は、その枕許へ二人の息子を呼び寄せて、

『わしはもう取る年だし、大分弱つてゐるから今度は助かるまい。就いてはその前に、お前達にいつて置きたいことがある』と云ひました。

二

『わしはお前達に何も殘してやらないが、しかしお金の要る時には、不自由させないやうにして置いてやり度いと思ふ。

そこで云つて置くのだが、御殿の隅に王樣の寶の入つてゐる石庫がある。往來に向つてゐる壁の石に印がしてあるから、その石を一つ取除けると、樂に中へ入り込める、あの石は二人掛れば、さう、一人でも退けられない事はない。さうすれば鉦前にも門にも觸らないで、勝手に入れるから、もしかお金の要るやうな事があつたら、あの中から貰つて來るがいい。王樣はこんな事は御存じないから、うまくやれば見つかる氣遣ひはない。あの方がわしにチヤンとお禮をして下されば、この事は云はずに置かうと思つたのだが、慾張な方だからわしにも禮を惜んで拂つて下さらなかつた。わしも然うだらうと思つたから、こんな仕掛をして置いたのだ。いゝか、今云つた事は分つたか。』

かう云聞かせると、年取つた石工はそれから直ぐ死んでしまひました。

後に殘つた兄弟は父親のお葬式や何かで、元より貧乏な家ですから、すつかりもう一文なしになつてしまひました。すると死際に遺言して言つた父親の言葉を思出したので、ある晩、月が高く上つてから、ソツと石庫の傍へ行つて、二人で壁の石を撫でゝ見ました。印は直ぐ見つかりました。そこで兄弟は中へ忍込みましたが、何時までも其處に愚圖々々しては居られませんから、手ばしつこく金貨の山から、自分達の持てる丈のお金を取つて、急いで外へ出ると、又石を元の通りにしてそのまゝ家へ歸りました。二人はそのお金を母親に見せて、安心させました。

もしこの二人が、父親のいつた通り、お金の要る時だけ取りに入つてゐたら、さう急には見つからなかつたのでせうが、そこがそれ隱す事といふものはどうしても見つかり、惡い事はどんなに隱しても知れずには居ないもので、兄弟はお金の要る時にも、お金の要らない時にも取りに行きましたっ二人はその翌晩も、その翌晩も……それから毎晩出掛たのです。

石庫の中へ見廻りに來た王樣は、眼に見えて減つて行く金貨の山を見て驚きました。

『これは訝しい。どうも此の金貨を持つて行く者があると見える。よし〳〵、では一つ其奴を捕まへてやらう。』

かういつた王樣は、直ぐと人間の足が入る位の大きな罠を拵へて、石庫の床に置きました。

その晩、石屋の息子達が忍込んだ時に、先へ入つて來た弟の方が、その罠に足を挾まれて、思はず『あッ』と聲を立てました。

三

罠がその足首に喰込んで、シツカリ締付けるその痛さは、とても我慢も何も出來ない位でしたが、石工の弟は人に聞付けられては大變と思つたので、二度とは聲も立てず、チツと痛みをこらへながら、

『兄さん、危いッ、罠がありますよ。僕はやられましたがね、どうかして此の足が抜けないかしら。』

と兄に氣をつけて、自分では罠に掛つた片足を抜かうとして骨を折りました。兄も傍へ來て一緒に手傳ひましたが、それはどうしても抜けませんでした。で到頭それが駄目だと分ると、弟は兄に向つて、

『では仕方がない。僕の首を切つて、兄さん、持つて逃げて下さい。さうすれば誰がした事だか分らないから、早くですよ、愚圖々々してゐて見つかつた日には、僕ばかりかあなたの首も切られなければなりませんよ。』

と云ひました。盗賊をするやうな者でも、兄弟を思ふ心から、自分が死んで兄の命を助けたいと思つたのです。盗賊でさへかうです。だからそれよりも増しな人は、兄弟仲好くしなければならない筈だと思はれます。

兄も大層悲しがりましたが、どつも外に仕方がないので、よんどころなく弟の首を切り、それを持つて逃げ歸りました。

朝になつて金庫を見廻りに來た時、王様は吃驚しました。

『いやこれは驚いた　盗賊は一人かと思つたら二人だわい。仲間の者の首を持つて逃げをつたな。うん、まだ一人生きてゐるから、其奴を見つけ出してうんと仕置をしなければならないぞ。』

と云つて俄に兵隊を呼び集め、首のないその死骸をお城の堀に掛けさせ、町の者に見せました。そして番兵を置いて、その死骸を盗まれないやうに守らせ、又もしその胴許りになつた人間を見て、涙を滾したり、聲を立てて泣いたりするやうな者があつたら、容赦なく引括つて調べ上げれば、この盗賊が何處の何者だか分るだらうと云ふので、チヤンと番をさせて置きました。

四

さても石工の兄息子は、弟の首を抱へて歸つて來ると、母親に一切話して聞かせました。母親は大きに腹を立て、その胴がらを取つて來て、首と一緒に埋めなければいけないと云つてどうしても、承知しません。

朝になつて死骸がお城の壁に掛けられ、晒し物になつてゐると聞くと、母親はもつと怒りました。そして王様の所へ行つて、弟の死骸を貰つて來いと叱りつけました。兄息子も途方に暮れて、どう爲ようかと思ひましたが、やがて皮袋に入つたお酒を買込み、それを驢馬につけて、お城の方へやつて來ました。

そして番兵のゐる所へ來ると、皮袋の口から緒を少し緩めて、お酒をボタ〳〵こぼし初めました。

『やあ、大變々々、お酒が滾れる、滾れる。』

と騒ぎ立てましたから、番兵は驚いて見に來ましたが、この有様を見ると、手傳つて袋を縛つてやるどころか、我先きに洋杯を取りに行つて、そのお酒を受けては飲み、受けては飲み、皆で飲みました。息子はわざと腹を立てゝ、怒りつけますと、番兵達は、

『まあ、そんなに怒るものではない。』

といつて慰めました。

そこで息子もお城の石垣の下へ行つて、驢馬を繋ぎ、酒袋をシツカリいはへ直しました。

すると番兵がその周圍へ集つて來て、笑ひながら話掛けましたから、息子も機嫌を直した振をして、お酒の壜を一本宛皆に渡しました。

番兵達は顏を見合せて居ましたが、

『どうも君が一緒に飲んでくれなければ、吾々も飲む譯には行かないが。』

と云ひました。息子も宜しいと云つて一緒に飲み出しました。そして又一本宛、何度も壜を渡しましたから、到頭、番兵は醉拂つてしまひ、地端へゴロ〳〵轉がつて寢込んでしま

ひました。この間はかなり長かつたので、日が暮れて、四邊が暗くなりました。息子は四邊を見廻して、誰も見て居ないと分ると、ソツと石垣へ忍び寄り、驢馬を踏臺にして、其處に下つてゐる弟の死骸を取下ろしました。それから眠つてゐる兵隊の片方の口髭と頰髯を剃落して、ドン〳〵家へ歸りました。

五

夜が明けてから番兵共はむく〳〵起上りましたが、見るとかんぢんの見張りをしなければならない死骸の影も形もありませんから、吃驚仰天して、急いでお城へ知らせに行かうとして、氣がついて見ると二度喫驚です。誰の顏にも髭が半分しかついて居ません。

『どうしたんだい、皆の顏は、見つともない。』

と云つた兵隊も、自分の顏は見えないから分らないのですが、ヤハリ皆と同じやうに髭が半分しかないのでした。さてはあの男にやられたかと氣がつきましたが、元々お酒を飲んだ自分迄の落度があり、王樣に申上げれば罰を喰ふに極つて居ます。

それに半分髭の顏をして、御殿へは歸れませんから皆こそこそ逃出してしまひました。

この事が分ると町中は大騒ぎです。王樣は火のやうになつて怒りましたが、

『それにしても誰がこんな事をしたのか。一體、どんな利口者がやり居つたのか、その男の顏が見度いものだ。』と溜息をついて云ひました。

それから急にお觸れを出して、王樣の金庫へ入つた者が、どうして中へ入つたか申出れば、罪を宥して、王樣の娘のお婿さんにすると云はせました。使ひの者は大きな聲で國中そのことを觸れて廻りました。

そこで石工の息子は、眞直にお城へ行つて、王樣の前へ出て是れまでの話を殘らず話して聞かせました。すると王樣は感心して、

『いや、埃及人といふものは、何處の者にも負けない利口者だが、お前はまたその埃及人の中でも一番利口な男だなう。』

と云つたさうです。（をはり）

豊作唄

野口雨情

山椒　山椒の木で
雀が啼いた

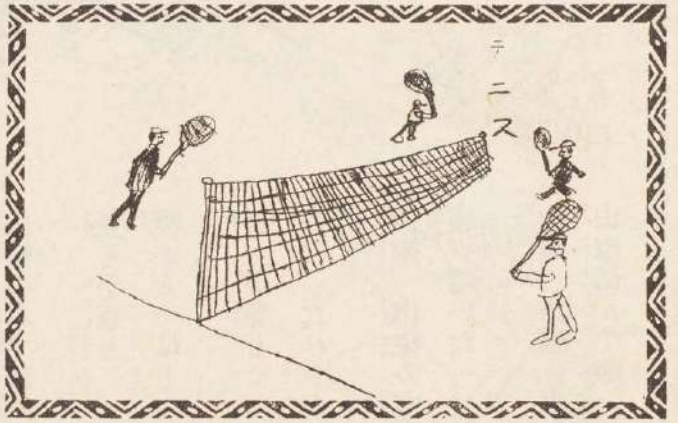
足で　山椒踏んで
山椒の木で啼いた

豆も小豆も
莢から　はしる

麥も小麥も
みな　たれさがる

山椒　山椒の木で
雀が啼いた

山椒　山椒の木で
山椒踏んで啼いた



自由畫「テニス」（賞）
東京府下中澁谷　櫻井忠誠（六歳）

童謡　野口雨情選

蛙

東京　高井宮

蛙が　ドタ靴はきだした
お父さんの　ドタ靴
はき出した
やんこら〳〵
はき出した

あくび

群馬　青柳花明

あくびをしたら
涙が出て來て
こんちは
こんちは

仲よし小星

東京　中山汰二

仲よし　小星
並んで　遊べ
仲よし　小星
仲よく　遊べ

家鴨の子

千葉　篠崎德太郎

あひるの子供
よちや〳〵歩いて
日向へ來たら
ねむくなつて　ねむつた

つくし

神戸　二瓶慶子

小草のかげの
ひよろ〳〵　つくし
袴はいて、おいで
袴はいて　おいで

霰と雀

大阪　黒川義明

トタンの屋根に
霰が　ぱら〳〵
トタンの屋根に
雀も　ぱら〳〵

自由畫「食堂」
横濱市山下町　三田妙子

からす

東京　山田吾郎

からす　からす
山見に行かう
あしたは　雨か
雨ならよそう

つつら

長野　木下右治

つつらの櫛は　重い櫛
一本折つて　そらくれる
二本折つて　そらくれる
三本折つて　ほかーん

星

熊本　松本桑吉

お月さんが
丸い提灯さげて
お星さんの世界を
照らさうとしてる

親雲雀

東京　北村望邑

巣の中の
親の雲雀が
天のお話　聞かせてる

女の兒

滋賀　大高寅雄

道であつた　女の兒
ひなげしの花もつて
三間いつて後見て
二間いつて後見て
駈けて駈けて　いつた

煙突

東京　佐々木國治

町の中の
煙突は
細くて
長くて
氣がもめる

おてんとさん

仙臺　佐藤愛子

おてんとさん
何に見てゐるの

自由畫「私の妹」
東京千駄ヶ谷小學校尋六　阿部ときこ

雪の山

金澤　宮本重雄

雪の山作つた
僕のは高いぞ
君のも高いぞ
どつちが高いか
作りつこしようか

雪

山形　佐藤欣造

ふわり〳〵降つた雪
お月樣の
赤いリボンは
ありますか

緋鯉

東京　西村きよ

浮いた　浮いた　緋鯉
友禪模樣の
着物着て、浮いた

やもり

京都　大原　英

雲雀は　まあだ
巣も作らない

かつこう

廣島　新谷芳春

かつこう　かつこう　かつこうと
かつこう鳥が啼きました
向ふのお山の木の上で

朝から晩まで啼きました

惡龍の閉口

東京　新野新一郎

惡龍が閉口した
スタンに負けた
水もくんだ木もはこんだ
惡龍が閉口した

やもり　やもり
壁の上の　やもり
何に思ひ出した

日向ぼつこ

福岡　井上ノブ子

日向ぼつこしながら
鶏は　コツコと啼いたつた

三毛は　ニヤア〳〵と啼いたつた

雨だれ

東京　蒲田乃六

大ふり　小ふり　雨が降る
軒の雨だれ　テントロロン
テントロ　テントロ
テントロロン

水車

山梨　越山季一

カツタン　カツタン
米つき水車
麥つき水車
ロー　ロー　ロー　ロー

あめん坊

愛媛　舟木糸吉

あめん坊　あめん坊
あしたは　日曜だ
背戸へ出て
遊べ

白い小菊

東京　三原沼太郎

お星さまの涙が
廣い野原におちて
野原の　野原の
白い小菊になつた
白い小菊になつた

自由畫「花びん」
兵庫縣城崎郡田鶴野村　奥村よしゑ

幼年詩

若山牧水選

ひばり（賞）

名古屋市東區新出來町五ノ八〇　櫻井妙

ぴいぴいないて
青い畑から
とび立つひばり
天まで行つても
こえはきこえる

評、きれいでそして元氣がよい。（牧水）

いもうと（賞）

茨城縣眞壁郡若柳校尋六　栗野鐵三郎

いもうとのわすれんぼ
いまたのまれた仕事をば
わすれて行つちやつた

評、あなたゝちの笑ふ顔が見える樣です。（牧水）

綴方

編輯部選

ねずみ（賞）

京都市翔鸞小學校尋四　苅谷太郎

三月五日頃である。僕と孝道と三郎とが東の家へ行かうと思つてくると、みぞの中に親ねずみと子ねずみとが居つたから、これはうまいと思ひ、にげるといかないから、そろそろあるいて、家へかへり板や竹をもつて來て、東の方に板をさして、その板がぬけたらにげるから孝道がゑさへて居る役で、三郎はねずみが出たらこちらにも板をさす役であつて、僕はあちらからあぜ竹でつつく役であつた。いよいよはじめ出した。僕はつつきもつて出たか出たかとせいて居る。三郎はまだ出んといつてゆつくりして居つた。

僕はこんどこそ出してやらうと思ひ、一生けんめいきばつたら、三郎は出たと言つた。僕はすぐに板をとつてこちらにもさした。

その時東にさしておいた板を孝道がとつてしまつたからねずみ親子はにげてしまつた。あとで僕は孝道をしかつた。

自由畫「お寺」　東京市東陽小學校　榎本トキ子

いたちとり

福井縣坂井郡本荘校高二男　角谷政次

朝早くから
いたちとりが
ふくろかついで
あぜ道を
あるいてゐる

評、大人の詩にもない樣な面白い所があります。（牧水）

雨

茨城縣水海道小學校尋六　河田照子

雨雨おまへは
どうしてそんなに
ちびちび降るの
ふるならもつと
ざつと降れ

評、あなたの氣性がこのうたの中に出てゐます。（牧水）

屋根のかわら

千葉縣東金小學校尋四　鈴木ひで

屋根のかわらは
わからあ見せて見ろ」「あかんべい」と言つたら今度は見せろ〳〵とねだり出した僕は「見せねい〳〵」と面白がつて世話

日曜（賞）

茨城縣結城郡石下町東野原　村嗣長逸

何をしても面白くないので倉の二階で古ざつしをさがして居た。讀みたいと思ふ樣な本が無い。盆入れの箱を一つ見付け出した。僕はこれを持つて下へ降りた。そして板のはつて無い方に紙をはり、板のはつてある方にはりで穴を開けた。そしてわたいれでつぼうをかぶり、穴のあいて居る方を外にし、紙のはつてある方を顔の方に向け、おでんとう樣のさしこむ方にそろ〳〵あるいて行つた。すると紙へ障子なんかがうすくうつつた。穴を今度は多きくした。するとさつきよりよけいにはつきりわかる、僕は非常にうれしかつた。あした學校へ行つたら皆の事たまげらかしてやらうと思つた。

そこへ弟が來て「何んだかそりや」「わんらがわかめい」と言つたら「見せれば

自由畫「墓」　不明　川端三郎

こひのこけらのやうだ

日の出

愛知縣彌富小學校尋四　伊藤　豐

日が出た
兩手をひろげたやう

すずめ

山梨縣小淵澤小學校尋五　宮澤　トシヲ

せんころすずめをとつたがな
かわいそうかわいそうとおもつて
すずめのあしへこれをとるべからず
宮澤としをとかいてはなした

死んだ夕べ

東京市外大森町不斗町一一一二　衛藤　新二

となりの父さん
死にました
大きな星は
だまつて西に
とんでいつた

夕方

長野縣上水内郡戸隱村　渡邊　忠造

燒かせた。

おつかさんがおはりをして居たが「やかまし何んだ長、其んなおとめ見てなもの菊にやつちめ」と言つた。弟は尙見せろ〳〵と云ふので「そ―見ろ野郎」と言つてつん出した。着物をかぶらないのでうつりつこない「何んだかこんなの」つて投げ出した。今度は着物をかぶせて「そら見て見ろ」と言つたら今度は「あれ何んたかいごいてら」と言つてをかしな顏してる。何んだかわかつたか」と言ふとひつくり返しひつくり返し見て居る。

おつかさんも來て着物をかぶつて見たが「うまいものをこせたな」と言つた。

つみ草の思ひ出

東京市外巢鴨町三丁目　人見　靜子

まだ尋常五年位の時でした。あるお天氣よい日曜に、おばあさんにはないしよでお友達と摘草に行く約束があつたのでこつそり竹の皮におにぎりと梅ほしをつみ袂に入れてお友達を三人さそつて出かけました。先づ染井の墓地をぬけるので、墓地へ參りました。すると二三人のお友達に逢つたので、おにごつこや人取りなどしました。そのうちにどんがなりましたのでお友達はかへりましたから、三人は墓地の裏の方のしば原で竹の皮をひらきました。そしてめい〳〵に持つて來たものを出して笑ひながら、一口ほうばつた時、だれかの足音がしたのであわてゝ大いそぎに袂やふところにねぢりこんで、知らないやうにすましてしまひました。其れは道を通る人でしたので安心して出さうとしますと、あんまりあわをくつてゐたので、足許におにぎりの食ひかけと梅ほしが二つ落ちてゐました。三人は顏を見合せてふきだしました。氣がつけば其ればかりでなく、手や胸のあたりだの、袂の中は御飯粒だらけになつてゐるので、其れをすつかり取つてから大急ぎでのどへつかへたり、梅ほしを大

陽がかげり
お庭へ出たら
李がちら〳〵
散つて居る

だちやうのうた

山口縣柳井小學校尋二　中村　正樹

だちやうが
くびをのばした
だちやうは
づるづるくびをのばす

どぶねずみ

神戸北長狹小學校尋二　二瓶　正子

大きなねずみ
小さなねずみ
どぶの中で
あそんでる

工場の氣笛

東京市芝區三田四國町二ノ四　松下　春三

工場の氣笛が大空に
口にほうばつてすつぱかつたりしながら
みんな食べてしまひました。それから、
梅ほしのたねのなげつこなどをしてゐる
までつみ草に來たことなどは忘れてあそ
びました。其のうちに日が暮れさうなの
でかへりました。道でつくしん坊三本と
すみれをつんで來ました。

動物園

東京市外高田第二小學校尋一　岡　毅爾

おとなりのおぢさんと動物園に行きま
した。鷲谷で下りまして門からはいると
孔雀を見ました。もう一つの孔雀は羽が
小ひさくてきじによくにてゐました。そ
うはおせんべでもやるとはなにすつて口
の中へほんと入れます。ぺりかんはよく
ばりでひとのそばにをりますがそれはど
じようを自分ばかりでたべたいためです
　兎は白が二ひきで、黑いのが一ぴきで
した。なかよし三ぴきでちよろ〳〵と水
をのんで居りました。くまはよろこび、
てつぽうへひつかゝる。なんかくれくれと
ねだつて居ります。
こひはいせいがよくてひら〳〵する。
金魚にはこひくらいの大いのがゐました
　さるはみかんの皮かなんかたべてゐて
子さるがほしがつてけんかをするので小
やから出てきたさるはおどろいてゐます
　あみの中に池がありまして、水どりは
がちようやかもやそんなものがゐました
　僕は兎にくまにかんがるう、それから
かんがるうの子もすきです。それから、
ぞう、ろばなどもすきです。きらいなの
はぺりかんです。
　かへりにはやつぱり鷲谷からのりまし
た。こんで〳〵しようがありませんでし
た。

水道ばたで

東京市城東小學校尋四　池上　一郎

ついこの間の事でした。鈴木君と僕と
で小便室へお湯をくみに行くので、ばけ
つを取にいつた時の事でした。ばけつを
いすがうと思つて、一番たくさん出る所

ポーッと鳴つて
燈がついた

朝起

愛媛縣金田尋常小學校尋五　西川ツヤ子

今朝起きて
顔を洗つていたら
鶯がホーホケキョと
勇ましい聲で歌つた
あすも來て鳴け
鶯よ

雪どけ

福井縣高濱小學校高一　胡間六郎

向ひの家の
くだけたとゆから
雪どけの水が
ポートポト

櫻のかげ

埼玉縣兒玉郡乾武小學高二　長田豐

風もない春の日に
窓から庭をながめたら
櫻の影が動かずに
廣い庭に
靜かにうつつてた

雪

兵庫縣高岡小學校尋四　加藤金次

あめよ　あめよ
天へ上つて
雪になつてこい

煙草會社のふえ

朝鮮京城永樂町二ノ七十七　佐藤義信

ブー〳〵〳〵と
きてきが鳴つた
三時のふえが今も鳴る
煙草會社のふえの音
何時まで鳴るのか
ふえの音

ひばり

滋賀縣稻村小學校尋四　福原助次郎

鶯きたのでひばりもきたね
お前のお宿はどこぢやいな
いや〳〵僕等は宿がない
麥の畑でこしらへる

をまはした。もつと出さうと思つて力一ぱいにまはしたら水道のまはす所から水が一つぺんに勢鋭くとび出した。水は天井にぶつかつて下におちて來た其時はまるで水をあびてるやうだつた。僕は鈴木君に早く小使さんをよんできてくれといつた。其うちお友だちのすがたが見えましたから、だれかと思つて顔を見ましたら、重野君だつたから僕は重野君ちつとここへ來てくれたまへといつた。重野君はいくよといつて來てくれた。僕は重野君ぬれるだらうけれどもおさへてくれといつた。重野君は今日にかぎつてやつてくれないで見てるた。重野君はつまらないものですから、すぐかへつてしまつた。

鈴木君と小使さんが來た。小使さんは今わかい小使をよんで來るからまつておるでといつてすた〳〵下へおりていつたやがて若い小使さんが來てこれは大へんだが度々あつた事なんだといつて、たびをぬいでほだしで水の中にはいつていつて水をとめて呉れた。來る人、來る人は見んなおや〳〵といつてかへつていつた。僕はなをつた時は非常に安心した。

わすれえぬ人

高知市小學校尋三　本間好子

八月二十八日、私はお父樣や姉さんたちとさん橋へ行きました。其時馬の所へ行くと、白い洋服を着たかはいらしい、女の人が二人馬に乘つて居ました。其の人は金のピカピカ光つた指わをはめて居ました。私たちは見とれながら歸りました。夏休がすんで學校へ來た時、はじめさん橋で見た人が來て居るのでふしぎにおもつて居ました。あくる日學校へ來ると又きのふ來てゐた人が來て居ました。少ししてけいこがはじまりました。するとあのしらない人が私たちの教室へはいて來て、私たちの組の人となりました。そして毎日この學校にかよつて居ました其人の名は田中さんといつて居りました

その田中さんは八幡樣のお祭の日、この學校をおやめになつて、又も米國へおいでになりました。その時私はお見送りしました。船の出る時には、私も一しよについていきたくてたまりませんでした。私は少しもあの田中さんをわすれません。

お角力

東京府大久保百人町一八七番地　鈴木一誠

僕が夏大原にいつた時、お角力を近所の子供とした。僕はせいがたかいので皆がこはがつた。「あいつせいがでけいからおらいんや」といつて達ちやんがにげた。達ちやんは僕のとまつてゐる宿の親類の子供で年は十二だつた。力はすいぶんある。ある時は僕がまけたこともある。「おいだれでもよいからきんね」と僕がいつたら傍で見てゐた大工屋の小僧が「おらすんべ」といきなりはだしになつた。大工屋の小僧は十五である。見るところ大變つよさうなので僕はおかなくなつた。そしてよさうと思つた。だけどいくぢがないと云はれるのがいやなのですぐ角力をとつた。兩方でおびをもちあつた。向ふは目方があるので仲々うごかない。僕は一度あしがらをかけたがころばないからやめた。するとにげた達ちやんがきて、「ほらやつてるな」といつた。あせがでてきた。小僧は片手で鼻をかんで着物でふいた達ちやんはきたねいやといつたら「なにがきたねいんだい」といひかへした。僕はやくころがしてやらうと思つてこしをりをしたら向ふがどすんとたをれた。そして小僧はあたまをうつた。「いたけ」と達ちやんがきくと「いんや平氣よ」とまけをしみをいつた。僕はうれしかつた「おめいよわいな」とじまんした。小僧はくやしさうに頭をおさへながらむかうへいつた。きつと頭がいたかつたのだらう。

すこしたつと女中がよびにきたのですぐかへつた。

通信

自由畫短評

山本　鼎

△『秋にあへば人なつかしく亡き友の文がらあはれ涙そそるる』といふ歌を筋に書き添へた、石川とも子さんの畫は夢二さんの畫を寫したものですか？　さうでないにしてもたいへん模倣的で折角の骨折にあなたといふ人のほんとうの技術が見えないのは殘念です。いつもこうした畫が澤山あつて惜しく思ひます

人物の描寫には陰影をつけずに描いてあるのに背後に投げた影だけが重く描いてあるのも變です。

△荒保君の『ダルマ』は掛物の畫の寫しですか。――自由畫募集にはこういふ畫はすきません。

△川崎春義君の鉛筆畫はなか〳〵良い、落着いて物の形を見て居るからです。

△對馬千代一君の『擧劍』は實際の場合を見て描いたのですか？

△複本トキ子さんの鉛筆畫は、少し線が弱々しすぎますね。あれでいゝのですからもつとはつきりとお描きなさい。

△木俣修二君は此頃少しまづくなつた。樂がき的なぞんざいさが目立つて來た。もつと沈着に、目で見た實物の形なり調子なりを表現すべく苦しまねばいけない。其苦しみに無畫な樂みを感じるやうにならなければいけない今度の『駐在所』なんかはきたない程黑々として居る。もつと調子の變化が君に見えて居る筈だ。

△小池榮一君のペン畫惡くはないが、建築のあらはれがまるで附木で造つたやうに薄ッぺらだ。細かい處を描きながら、屋根の厚みなどを見て居ないからです。

△內田角藏君の鉛筆畫も別に惡くはないが、遠くの山があんまり濃く荒つぽく描いてあるために、ちつとも遠く感じられない。

△山守才作君のも惡くはない。併し、家のまわりの木は木には見えずに棒にごみがくつゝいたもの見たいですね。

△服部成夫君のも小竹博君のも良い。服部君の樹木はよくかけて居る。

△梅村登美子さんは火鉢の處だけ定木を使つて居るが、あゝいふ畫には定木を使はずに手でおかきなさい。手を火にあぶつて居るのですつて、火を摘まうとして居る處のやうです

△岩下五郎君の『二階から見た景色』は輕妙に描いてあるが、よく見るといけませんね。ぞんざいです。色などのつけ方も、草はあれでもいゝとして、屋根の色が皆一樣にブルシャンブリューであるのはよくありませんよ。君の目が指示する屋根の共通した色がある筈ですかね。

△重野秀雄君の『アメ屋』は面白い畫です。

△松下喜美子さんの『城跡』も奥村よしみさんの『村はづれのしや生』も落着いて描いてあつていゝし、かいた場所も面白く思ひます。

△木浦紫雄君の寫生畫もなか〳〵しつかりして居る。しかし本はいゝとして机がたびして居る。机だけがぞんざいに描けて居るんです。（四月八日）

童謠の選後に

野口雨情

去年の今頃にくらべて見て、この一年間のうちに、遠い田舍の學校にまで童謠がうたはれるようになりました。學校の先生方は、文部省できめた唱歌のほかは、うたつてはいけないととめても、乾燥無味な唱歌にあきてゐる生徒だちは、承知しないやうになりましたとらはれた考への人達からいはせれば、こまつたものだと思ふでせうが、私達のたちばからいへば、いゝ傾向だと信じられます。いつたい、今までの唱歌は、非藝術的で温みがどれも缺けて居りました。童謠を知らない時分ならば、今の唱歌で滿足が出來たでせうが、新しい時代にふさはしい童謠が生れて來た以上は、唱歌なんかに滿足してゐる子供はだんだんすくなくなつて來ました。それだけ日本の文化が遠い田舍にまで進んだ譯なのです。

それから、「讀者文藝號」の懸賞應募童謠は締切りまでに全部で、一千二百八十一篇ありました。原稿の書きやうがわるくて懸賞のだか普通のだかはつきりしない分は、仕方がないから本號の童謠へ加へて選をすることにしました。

大懸賞の前に（續方）

選者

こんども特に優れたものは來月にまはしました。そこでほんとうに選ばれたものが、讀者文藝號に出ることになるのです。

私は嬉しさの餘り慢へ入れたり出したりして家へ歸へりました。（神戸　飯田喜一郎）

▲福岡の小野力松君、神戸の濱田寛義君、北海道の永山公明君、東京の佐藤文太君、どしどし投書して下さい。東京の川尻東次君・福岡の荒川清二君・福島の佐藤貞吾君、誌友勸誘についていろ〳〵ありがたう。（記者）

△記者先生、僕の方では四五月頃は櫻の花さかりですから、ぜひ四月十五日あたりまでにお出で下さい。（福島　佐藤貞吾）

▲ありがたう。いゝ温泉があるといふことを聞いてなりますので、ぜひ行きたいと思つてなりますが、雜誌の方がどうにも忙しくてだめです。どうかあしからず。（記者）

△野口雨情先生の民謠集「別後」が出たやうですね。民謠は童謠とうちがふのですか。僕は童謠を研究してゐる者ですが、參考になるでせうか。（宝蘭　岡田一夫）

▲一言で申し上げれば、大人の境地を唄つたものが民謠で、子供の境地を唄つたものが童謠です。むろんいゝ參考になります。野口先生の民謠は現在の童謠作家に非常に影響して

誌友募集

誌友には大特典あり規則書は編輯部宛に申込めばおくります

通信と問答

讀者諸君のうちで、感想や意見や希望や質問などがあれば「通信」と記しておよせください。質問にはお答へいたします。

△「金の船」がます〳〵立派に發展してゆくので僕はうれしく思ひます。實に日本一です。僕はしつかり愛讀します。（松山　加藤正文）

△「金の船」は大發展のやうですね。この後もどうかその力で。（東京　井關正）

△まつて〳〵まちとほした四月號がやうやうとゞきました。僕はどんなに喜んだでせう。繪の上手な岡本の小父さんの童話カード、僕はあまりの美しさに目がとろけさうになりました。僕はだん〳〵「金の船」がすきになりました。讀者諸君いつまでも友達のやうに仲よしにして行きませう。（神戸　淀川長治）

△「君金の船の愛讀者になつて僕等と共に投書せいや」熱心な筏君や栗田君の勸める言葉は私の心を動かした。「そない君等が言ふが金の船はほんとに面白いか」「面白いとも、賞金かてようけある。賞品かて良いぞ。四月號見て見い。童話一等六拾圓や。」私は一度買つて見ようと母から金を貰らつて本屋へ買ひに行つた。美しい表紙、美しい口繪、美しい附錄、

今月出したものもいゝ方です。

人見さんの『つみ草の思ひ出』は一つの文章がめちやくちにながいので、ところ〴〵きりました。もすこし短くきるやうになさい。

本間さんの『忘れ得ぬ人』を讀んでゐると、西洋の詩の味ひがあります。

殺ちやんの『動物園』には非常一年生の小ちやい眼が光つてゐます。ペリカンといふやつまつたくいやなやつらしいですね。『お角力』を書いた鈴木君はこれからがだいじです。わるだつしやにならないやうに。

來月へまはつたものは、先月は十篇しかありませんでしたが、今月はとても澤山で一々あげきれません。來月を樂しみに待つてゐてください。（ヤマモト）

◆「金の船」の合本◆

◆第三輯（第二卷十一號より第三卷四號まで六册合本）

新製本出來 定價一圓八十五錢

（裝幀は岡本歸一黃伯新案の意匠になり「金の船」金文字入、絲めて美麗）

◆第一輯（第一卷初號より第二卷四號まで六册合本）

第三回製本出來 定價一圓五十錢

◆第二輯（第二卷五號より第二卷十號まで六册合本）

第三回製本出來 定價一圓八十錢

◆金の船（アンデルセン號）世界名作童話集（全一册）

定價參拾五錢

應募童話に就て

記者

應募創作は何れも素敵な好評で、締切の最後の日などには自身でわざ〳〵編輯所へ屆けられる方が澤山あつた程の盛況で、童話だけでも三月末の調べに已に五百十篇といふたいしたものでした。なかには兒童の創作も隨分あつて選者は非常に意氣込んでゐます。

以前推奬しました大塚恒子さんの『烏とふくろふ』は今月發表することになつてゐましたが誌面の都合で來々月にまはしました。

ゐることは事實です。「別後」はすばらしい好評で、今に五版がでるさうです。（記者）

△山本鼎先生、私達のやうに途中から自由畫にはいらうとて努力してゐる者の爲めに、私達大きな者の繪を見て下さることができないでせうか。先生の小さな子供のための愛な私達大きなものにもお惠み下さることをお願申し上げます。（某生）

▲「何しろ只今のところ非常に忙しいので、どうもお氣の毒だが」と仰いました。（記者）

△自由畫はどんな利益がありますか教へて下さい。（京都　布浦芳雄）

▲山本先生のお話では、自由畫は單に、畫の修業ばかりでなく、人間のもつてゐる智慧や感情を美しく發にし、ひいては人格を向上させるものです。」とのこと。（記者）

△岡本歸一先生のお描きになつたエハガキのやうなものはありませんでせうか。あつたらお所を序にお敎へ下さい。（東京　永井光子）

▲まだきまつてはゐませんが、童謠のエハガキが神田のある書店から出るやうです。（記者）

▲沖野先生の「後の山六爺さん」が出たので毎月樂しみにためてゐます。（東京　篠原アイ子）

▲樂しい〳〵春が來ました。當地はまだ折々雪が降ります。梅の木の芽もだん〳〵大きくなつてそこゝの家々には可愛いゝ蕾の顔がします。今が一番讀書に好い時です。よく勉强しませう。終に諸先生方を初め誌上の皆樣の御健康を祈ります。（京都　稻葉健之助）

▲金の船誌友○鹿兒島　中川原三君○東京　池上一郎君○東京　福岡信夫君○岩手　佐藤久次郎君○神奈川　鈴木光次君○東京　井關正君○福岡　白井哲三君○神戸　濱田寫義君○札幌　相川正義君○愛知　平井宏君○神奈川　高橋親德君○兵庫　市毛豐備君○茨城　大串章君○鹿兒島　二川純雄君○大阪　上田奈色君○横濱　福王孝顯君○東京　永田華田君○朝鮮　菅谷秀雄君○千葉　隈部次雄君○東京　美濃部慶太郎君○東京　小泉平治君○東京　松平元子君○鹿兒島　小原巽君○山梨　高橋十成君○福井　松本喜造君○長野　肥後傳君○大阪　稻垣ひろし君○京城　佐藤義信君○大阪　吉武來君○鹿兒島　松田里二君○岡山　日比野澤君○埼玉　肥土喜三郎○深川　旗平トキ子君○滋賀　コドモ會○東京　高橋久君○横濱　近藤一路君○宮城　次島和雄君○臺北　四本綾子君○東京　草野松彥君○東京　小田キミ子君○東京　藤田雄雄君○群馬　萩野建治君○靜岡　松本剛君（以下次號）

新しく出た本

◆**薔薇の蹄子**（德永須美子夫人著）――德永夫人が童話を書くやうになつたのは、御自分の子供のために話してやりたいと思ふ童話が少い爲めであつたそうで、それだけにこの集に入つてゐるどの童話もお母さんらしい愛に滿ちた優しいお話ばかりです。夢の樣な面白いお話であつてしかも小供の美しい心を育てる處にこの本の大きな特色があります。（菊半藏美本二九八頁、神田中猿樂町十五、アルス發行定價壹圓八拾錢）

◆**鍋の兎**（小森多慶子著）女流童話作家として知られた著者の舍心の創作童話を集められたものです。どの童話にも著者の愛から湧いた子供の空想や詩情をつちかふやうな、美しい清い詩味があふれてゐます。（四六判一四七頁、本郷湯島天神町二ノ十三青空社發行　定價一圓）

◆**鳴る釜**（岩井信貫氏著）今度京都大學を出られた醫學士の岡氏が子供さんがたのために書かれた教育お伽噺集です。「鳴る釜」といふ面白いお噺を始め「純一と狐」「彼岸團子うり」どれも〳〵ためになるお噺ばかりですからお子さんがたの御一讀をお薦めします。（四六判二〇六頁、定價三十錢、大阪東區本町四ノ四石塚松雲堂發行）

◆**とんぼ**（創刊號）金の船童謠會の都築、加田、大沼山田、黑田、佐藤氏達が新に發行された日本最初の童謠專門雜誌です。菊判總六號のほんたうに氣持のいい誰にでも氣に入る雜誌です（毎月一回一部三十五錢、四谷舟町三日本童謠會發行）

◆**東の子供へ**（秋田雨雀氏著）――この頃出た童話集中で最も立派もなのゝ一つです。この著者は童話の專門作家として立つてゐる人だけに中々骨を折つて書いてをられる。面白い話といふよりは本當に子供の爲めになる話を書くのがこの著者です。（四六判二九〇頁、美本　本郷區弓町日本評論社發行、定價金貳圓）

◆**讀者文藝號（七月號）の募集作品選を行つたに就て**◆

讀者文藝號（童話、童謠、綴方、自由畫、幼年詩）は幾千といふ澤山な數があつまりました。あまり澤山な數なので最初各作品の中から二百篇づゝいい作品を撰選しました。豫選の中から更に一等以下の當選作を最選することといたしました當選外でも捨てがたいいい作品は本號の普通作品の中にまぜてのせて置きました。

記者より

▲春も暮れて行きますが、皆さんお變りありませんか。記者たちも非常な元氣でゐます。

▲今月は童話の方では長篇ものを多く並べて見ました。其代り來月は「讀者文藝號」ですから變つた短篇ものを餘計に掲げる積りです。

▲附錄の「後の山六爺さん」は如何でしたか一回また一回と面白くなつて、例の狼だのクロだの鹿だのが出て來て大活躍をしますよ。

▲楠山先生の「日本神話」はこれまでにない面白い書方ですから、たゞ讀者の皆さんから迎へられるばかりでなく、文壇の人たちからも非常な注意をひいてなります。西條先生の「鏡國めぐり」も次第に佳境に入つて來ました。次號からいよ〳〵本舞臺に入るのだそうです

▲大懸賞募集もいよ〳〵締切になりましたがどの種類の投書も山の樣に來てゐるので選者は中々大變です。七月號にはどんな結果が發表されますか、記者たちもわく〳〵して待つてゐます。樂しみです。樂しみです。

▲近い内に野口先生の童謡集が神田の尚文堂から發行になります。岡本先生の挿畫が澤山に入り、本居先生の作曲も澤山入るのだそうですから、出來たらさぞ立派なものでせう。

▲若山先生の歌集「くろ土」も今度發行になりました。最近の作を集めたもので大好評です

▲「金の船」の童謡演奏が四月二日横濱紀念館で催されました。本居先生の伴奏でみどりさんが歌はれ、大喝采を博されました。

少年少女創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

自由畫、幼年詩、綴方、何れも題は何でもかまひません。みなさんの見たこと感じたことを、みなさんの好きなやうに描いたり、作つたりして出して下さい。原稿には必ず學校と學年、または住所と年齢を書いて下さい。よく出來たものは雜誌に出します。なかでもよく出來たものには賞品をさしあげます。特にすぐれてよくできたものには「金の船」賞をさしあげます。

懸賞創作募集

童話……編輯部選
童謡……野口雨情先生選

童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内。優秀な作品は「推薦」又は「特選」として誌上に發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には貳圓、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓賞金として呈します。

（原稿は「金の船」編輯所へ送つて下さい）

東京市外田端三五一番地
金の船編輯所

定價壹冊參拾錢送料壹錢
三ケ月分三冊（送料共）九拾錢
半年分六冊（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊（送料共）參圓六拾錢

但し所年號四月號九月號は特別號で冊五錢ですから、御注文の節はこの號だけは必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。

振替口座東京參〇五七貳番

（送金）
▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一等便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割增しです
（注意）
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十年五月六日印刷納本（毎月一回）
大正十年六月一日發行（一日發行）

編輯人　東京府下田端三百五十一番地　齊藤佐次郎
發行人　東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地　横山森篤
印刷人　東京市小石川久堅町百八番地　大橋光吉
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

東京市麹町區飯田町六丁目
發行所　キンノツノ社
電話九段貳七五貳番

ほるぷ出版複刻版'83

會長　尾崎行雄
學監　遠藤文學博士　山内理學博士
顧問　井上博士、新渡戸博士　浮田博士、三宅博士　岡田前文相

◎講義錄の見本つき規則書は
ハガキで申込次第
無代で進呈します

綠の野に

溢るゝ喜び

僕は大日本國民中學會の會員だ

現代の活社會に立つては中等教育の素養が無い者は何事も出來ないといふ事を僕はよく知つてゐた。けれど家の都合で中學校へも行けないと知つた時あゝどんなに口惜しかつたことか！だが、今になつて考へれば何て馬鹿だつたらうと思はずにはゐられない。大日本國民中學會へ入會してからの僕は毎日愉快に働き愉快に勉强してゐる。君達もすぐ入會し給へ。中學校へ行かなくても此の講義錄さへあれば立派に中學卒業程度の學力が出來るのだから。

東京市神田區駿河臺袋町十六
大日本國民中學會
東京四二〇〇番　電話神田（三〇〇三番）（三〇〇四番）

本誌顧問

西川　勉氏
中山晋平氏
野口雨情氏
山村暮鳥氏
藤森秀夫氏
西條八十氏
北原白秋氏
三木露風氏
弘田龍太郎氏
本居長世氏
（イロハ順）

大きい宇宙をつくつて造物主が、私どもに童謡を與へてくれたことを非常に感謝してをります。私どもは今度日本童謡會と云ふ眞摯に純童謡を研究し、併せてその普及を計る會を作り「とんぼ」と云ふ月刊雜誌を發行しました。

私どもは先驅者の指導と皆さまの熱心な研究をあほいでその成果をあげようと思ひます。

童謡研究
月刊雜誌
とんぼ
四月創刊
定價一部三十五錢
會員誌代割引
其他種々の特點と便宜あり

創作童謡、童謡に關する論文、感想及び自由詩を募集します
會員規定は返信料を添へ編輯所宛に御申込次第送附致します

日本童謡會とんぼ社
發行所、東京市四谷區舟町三番地
振替口座東京四四一五〇
編輯部、東京市麹町區麹町六丁目七番地

五月號要目
表紙　初山　滋
曲譜　中山　晋平
童謡　野口　雨情
　　山村　暮鳥
　　藤森　秀夫
月評　西川　勉
論文　山村　暮鳥
　　加田　愛咲
社員會員童謡、自由詩、批評、地方童謡、童謡一覽、附錄、童謡祭當日の野口、西川兩氏の講演要項、其他滿載、菊版總六號

後の山六爺さん

沖野岩三郎

二

不思議な事には、圖書館のウーワン館には、書物といふものは一册もありません。大きな棚や戸棚の中には、火星から落ちて來た隕石だとか、富士山の爆發した時の熔岩だとか、新田義貞が稻村ケ崎から海へ投げ込んだ黃金造りの太刀だとか、日本武尊が御東征の時の作戰地圖だとか、イザナギの尊が、ヨミの國へイザナミの尊を尋ねていきなすつた時お用ひになつた松明の燃え殘りだとか、大國主の命の持つてゐた大きな袋だとか、そんなものばかりが、參考品として、活きた手本として列べてありました。それからもつと珍らしいものには、桃太郎さんの陣羽織だとか、かち〳〵山の狸の頭だとか、猿蟹合戰の蟹の爪だとかいふものもありました。

劇場「乞食座」の內外は本當に綺麗なもので、內部は千六百人がみな入つても、マダ半分から席が殘つてゐる程大きいものでした。

そこで千六百人が、落成式と懇親會とを兼ねて、其の乞食座で大芝居をする事になりましたので、

豐後の守ぶ右衞門が、其の脚本を書いて、芝居を仕組みましたが、さて稽古に取かかつて見ますと、役者になつて登場する人物が恰度千六百人要るぢやありませんか。

山六爺さんも、婆アさんも腹を抱へて笑ひました。

『千六百人がみんな役者になつて、お芝居をしたなら、誰が見るのですか。』

といつて越後の守え右衞門は不思議さうに尋ねました。

すると天鹽の守て右衞門はかう言ひました。

『それは元の總大將軍狼殿御夫婦と、副將軍「黑」殿と、猪殿二疋と、鹿殿二疋とにお見せ申すがよい。』

安房の守あ右衞門が手を拍つてそれを賛成しましたので、千六百人は七疋の獸を見物に招いて、大芝居をする事に相談を纏めました。藝題は『山六爺さん』といふので、春夏秋冬の四幕でありました。

翌日からは、ドーンの時計から、ヂヤーンの時計まで、六時間の間一所懸命に『山六爺さん』といふ藝題のお芝居のお稽古を致しましたが、毎日毎日千六百人は、乞食座へ行つてお芝居を一所懸命に稽古しましたので、七疋の狼や猪は、人間が一緒に遊んでくれないので、獸同志たつた七疋で淋しさうに廣ツ場を駈けツくらして見たり、土へ穴を掘つて見たりして居ましたが、それも面白くないと見え、お終ひには七疋共各々勝手に山奥の方へ分れ分れに遊びに行くやうになりました。

千六百人のお芝居の稽古が終りましたのは、翌る年の正月の十日でした。だから、正月十五日のドーンからヂヤーンまで六時間、衣裳をつけて本式に芝居をする事になりました。そこで一間四方の大きな紙へ、

山六學校、ウーワン圖書館、乞食座落成祝の爲、來る十五日ドーンよりヂヤーンまで、乞食座に於て、童話劇『山六爺さん』を演じます。

驚く勿れ、登場人員實に一千六百人！

木戸錢、下足預料申受けず。

と書きました。文字は例の但馬の守が達筆を揮つたのでした。

偖十五日のドーンが來て、千六百人の役者が出揃つて、支度が出來ましたので、チヤーン！　チヤーン！　と勇ましい拍子木の音で、幕を開きましたが、これはまあどうした事です。見物人は一人も來てゐないぢやありませんか。

『一體狼や「黑」は、どうしたんだ！』と山六爺さんは大聲で喧鳴りました。

『廣告を讀まなかつたのだなア、猪や鹿の畜生！』と云つて婆アさんも舞臺を踏んで怒りました。

千六百人の役者は一度にわあーツ！　と笑ひ出しました。

その時、舞臺の一番後の方に居た周防の守す右衞門が、

『見物人は居なくツたツて宜いぢやありませんか、此のままお芝居を續けませう。』と大聲で言ひましたので、みんな、それに賛成して其儘お芝居を初めました。

舞臺の正面には、相模の守さ右衞門の書いた綺麗な青空に、キラキラと太陽の光つてゐる背景がありました。大勢の百姓達は、たらたらと流れる汗を拭きながら、

『暑い暑い、こんなに暑くては、やり切れない。暫く此の樹蔭で晝寢をしようぢやないか。』と云つて、ごろごろ草の上や、砂の上に寢轉んでしまひました。

其所へ白い衣を着た美しい女神が現はれて、

『氣の毒な百姓達だ。斯んなに太陽が熱くては働けないだらう。宜しい今に恰度いい氣候にしてあげます。そして百姓達の眼を樂しませる爲に美しい綺麗な花を野原一面咲かせて上げよう。』と仰ツしやつて、そのまま天へ昇つて行きました。そして女神は御自分の右の袂をお裂きになつて、それで太陽を包んでしまひました。

『これで恰度宜い鹽梅に暖かいだらう?』と仰しやつて、頭に挿してゐられた櫻の花を、ばらばらと地上へ投げられました。すると不思議にも綠の樹の間には、俄に紅や白の美しい花が一面に咲亂れました。

野原の草の上には美しい可愛い花が、あちら、こちらに咲きこぼれてゐました。

一人の百姓は眼を覺して、周圍をきよろきよろ見廻してゐましたが、大きな欠伸を一つして、

『おうい、皆の衆、起きて見ろよ。ぽかぽかと暖かい宜い天氣になつたぞ。それにまア不思議ぢやないか、あんなに美しい花が咲いてゐるだよ。』と言ひました。すると寢轉んでゐた多勢はむくむくと起きて來て、不審さうに四邊を見廻してゐたが、

『春だよ、春が來たんだよ。』と一人の男が言ひました。

『さうだ、春が來たんだ、だからこんなに暖かくて、あんなに美しい花が咲いたんだ。』と一人の女が言ひました。

『花見をしようぢやないか。』と一人のお爺さんが言ひ出したので、みんなは『賛成賛成』と言つて、急に酒屋へ行つて大きな樽を十も十五も擔いで來て、それを飲んで歌ふやら踊るやら大騒ぎを始めました。

たうとう百姓達は歌ひ疲れてしまつて、またも草の上にごろごろと寢てしまひました。

物蔭から出て來た女神は、百姓達の醉つ拂つて居る樣を御覽になつて、默つて點頭いたまま天へ登られました。

そして包んであつた片袖を太陽からお除りになつたばかりか、其の片袖で太陽を力一杯光るやうに磨き立てました。

遠い所から大勢の合唱で、

夏は來ぬ、夏は來ぬ。

起きよ人々、起きよ人々。

といふ歌の聲が聞えて來たので、みんな吃驚して起きて見ると、太陽はかんかんと照輝いて、いつの間にか野や山の美しい花は、みんな萎れてしまつて、油蝉が蒸暑いのを喞つやうに、ジイ……ジイ……と鳴いてゐました。そして第一幕は終りました。（つゞく）

坪内芳賀兩博士推奬文壇一流名家新譯

模範家庭文庫

我出版界の誇

花鳥よりも美しく世界の面白き眼を盡せる寶殿！

全十二卷 各卷參圓八拾錢 郵稅各十八錢

平田禿木先生譯 岡本歸一先生畫

第九卷

ガリバア旅行記

三色版八三色二色凸版十二 木版寫眞版カット百餘 紙數五百頁 定價參圓八十錢 郵稅十八錢

人間が巨人にされる小人國、人間が一寸法師にされる大人國、空中を國が飛ぶ飛島、馬が人間よりも賢い馬の國から日本の江戸長崎まで見物して歸つた英國の航海者ガリバアの旅行記位不思議な本を、あなたは知つて居ますか。幾ら讀んでも讀み飽きず幾ら驚いても驚き足りない此世界的文學の、最大著書が今度初めて我國第一流の英文學者平田先生の翻譯に依つて、完全に趣味深く讀まれる事になりました。我が最初の純文藝的全譯として、まつ先にあなたの愛讀をお奬めいたします。

裝幀極彩色金模樣
極美高雅・各卷五百頁內外三色凸版木版寫眞版大小二百乃至三百入
六卷入書棚 新お伽模樣 燈畫附
實價參圓五十錢 送料參十錢

21 七版 坪內博士序 杉谷代水先生譯 **アラビヤンナイト** 上下
3 六版 芳賀博士序 中島孤島先生譯 **グリムお伽噺** 全
4 七版 坪內博士序 楠山正雄譯 **イソップ物語** 全
5 四版 長田幹彥先生譯 **アンデルセンお伽噺** 全
6 四版 平田禿木先生譯 **ロビンソン漂流記** 全
7 三版 楠山正雄先生編 **世界童話寶玉集** 全
8 再版 中島孤島先生譯 **西遊記** 全

發行所 東京神田 富山房 振替一〇五 賣捌 全國書店

K2A-18

大正八年十月十六日　大正十年五月六日印刷納本
（第三種郵便物認可）　大正十年六月一日發行（毎月一回一日發行）

夏のお用意は

三越へ、三越には夏の必要品が澤山取揃へて御座います、就中三越の六階の、小兒部にはお子様方御用の上品で持のよい、夏向きの品が澤山新着致して居ります、お子様方は夏は洋服に限ります、第一身輕るくもあり、可愛らしくもありまして、健康上からも經濟上からもお徳用で御座います、夏帽子も各種陳列

◆中形浴衣地陳列（五月十七日より）
◆團扇、扇子陳列（五月二十日より）
◆夏衣裳陳列（六月一日より）
◆格安反物賣出し（六月一日より）
◆鈍阿氏陶器展覽會（六月十七日より）

◆六月の定休日◆十日◆廿五日◆　◆營業時間◆午前八時より午後五時迄◆

東京　三越呉服店

東京　キンノツノ社　發行

（定價參拾錢）